

セルフ・モニタリングと対人不安との関係におよぼす 認知欲求の効果： 女子青年の場合

諸 井 克 英

I. 問題

はじめに

米国精神医学会の診断基準 DSM-IV (American Psychiatric Association, 1994) では、不安障害のうちの重要なカテゴリーとして社会恐怖 (social phobia) が設定されている。これは、未知者に直面させられたり、他者に注視されるかもしれない、社会的状況や行動状況で起こる顕著で持続的な恐怖を主症状とし、恥ずかしい思いをさせられたり困惑させられるという恐怖も伴う。ところで、DSM-IVの社会恐怖の項には、対人不安 (social anxiety) という用語も付記されている。対人不安については、後述するように、Leary(1973)が、自己呈示を中核概念とする独自の理論を提起している。彼の理論では、対人不安は、精神医学者が扱う不安障害の1つとしてよりも、我々が日常生活の中で経験する一般的な情動として位置づけられている。臨床社会心理学の枠組みによると (諸井, 1996)、“些細な臨床的問題”を扱ったり、“臨床的段階の前段階にある母集団”を対象とすることによって、日常生活の中で起こるさまざまな不全の改善や、臨床実践のための有益な情報を提供できる。したがって、健常者を対象とする対人不安研究もこのような意義をもつ。

ところで、先述の診断基準には含まれていないが、社会恐怖症に類似した概念として対人恐怖症 (anthropophobia) を挙げることができる。これは、人前に出ると不安や緊張が過度に生じ、赤面、発汗、吃音などの症状を伴うことがあるために、他者との接触を恐れたり、接触を回避しようとする傾向を指す (小川, 1995)。神経症の一類型とされる対人恐怖症は、欧米人よりも日本人に特徴的であるとされ、青年期に発症することが多い。精神医学者や臨床心理学者が対人恐怖症に関するさまざまな説明を試みているが、臨床心理学者の木村 (1982) は、行動生活空間の視点に基づく説明を提出している。

木村(1982)によれば、我々の行動生活空間は、次の3つに大別される。a) Aゾーン：相手との身体接触が可能な“私的空間”，b) Bゾーン：相互に意識可能となり、相互の社会的交渉が可能な“社会生活空間”，c) Cゾーン：対人関係が生じない距離。対人恐怖症者の場合、AゾーンとBゾーンの境界が曖昧であり、Bゾーンの幅が狭い。彼は、ヒポコンデリー性基調を素因としてもつ者では、青年期に必要とされるBゾーンでのさまざまな行動パターンの学習に失敗した場合に、次の2つの反応が生じると主張する。a) Aゾーンへの逃避と回避による退行や異常固定，b) Cゾーンへの逃避による孤独感や自己内閉化。これが対人恐怖症である。ヒポコンデリー性基調を前提とする点を除くと、彼の主張では、対人恐怖的“状態”は日常的な対人関係の営みの不全に由来することになる。したがって、円滑な対人関係を維持・発展させるための重要な機能の1つであるセルフ・モニタリング（以下、S-Mと略記）との関係から対人不安を検討することは、対人恐怖症研究の流れからも意義があるよう思える。

このような観点から、本研究では、健常者を対象として、対人不安やS-Mの基本的構造を実証的に明らかにし、その上で両者の関係を探ることにした。

対人不安

Leary(1983)は、対人的原因によって引き起こされる不安の独自性を指摘し、他者による評価の予測や他者評価への直面が対人不安の基本的原因であると考えた。その上で、対人不安に関する3つの理論（条件づけアプローチ，社会的技能アプローチ，認知的アプローチ）を検討し、自己呈示（安藤，1994参照）を中核概念とする独自の対人不安理論を提起した。

この理論によれば、人は、他者に特別な印象を与えたいと一般に動機づけられており、そのように実際に行動できるか確信をもてなかったり、他者がそのような印象をもつ可能性が低いと予想したときに、対人不安が生じる。つまり、対人不安は、 $SA=f[M \times (1-P)]$ と公式化される。SAは“対人不安水準”，Mは“特定の印象を与えようとする動機づけ水準”，Pは“その人が望む印象を生じることができるかという主観的確率”を指す。

Leary(1983)は、このPを自己呈示効率と呼び、これを規定する状況的要因と個体要因を挙げている。状況的要因には、a)相互作用相手の未知性，b)新奇的な役割を課される状況，c)行動規範が曖昧な状況などが含まれる。個体要因としては、a)自己評価，b)自己評価のための基準，c)過去の経験，d)社会的技能の自己認知などが言及されている。

セルフ・モニタリング

Snyder (1979) によれば、人には自分の行動の社会的適切さへの関心から他者の行動に敏感になり、自分の行動を統制する傾向がある。彼は、このような傾向を S-M と命名した。高 S-M 者は、自分の社会行動の状況的適切さや対人関係上の適切さへの関心から、社会的状況での重要な他者の表出や自己呈示に敏感になる。さらに、高 S-M 者は、これらの手がかりを自分自身の自己呈示のモニターに利用する。対照的に、低 S-M 者は、状況に適切である自己呈示に関する情報に注意せず、自己呈示レパトリーにも欠ける。彼は、S-M の個人差を測定する S-M 尺度も開発した (Snyder, 1974)。この尺度は、次の 5 側面から構成される。a) 自己呈示の社会的適切さへの関心、b) 適切な自己表出への手がかりとしての社会的比較情報への注意、c) 自分の自己呈示や表出行動を統制・変容する能力、d) 特定の状況でのこの能力の利用、e) 自己の表出行動や自己呈示の状況をこえての可変性。

Snyder によって提起された S-M は、対人技能の 1 つであるというよりも、“自己と状況” という図式を前提とする一連の心理学的過程を含むかなり包括的な概念である。高 S-M 者の課題は、自分が直面する (するかもしれない) 状況に適合する原型的人物イメージにそってどのようにして自己呈示を実際に行うかである。つまり、状況に適合して自己イメージがつくられる。高 S-M 者は、特定状況が必要とする人物タイプを同定するために状況特徴を解釈し、その状況に適切な原型的人物イメージをもつことが重要となる。ところが、低 S-M 者にとっては、現在貯蔵されている自己イメージ情報の中から、直面する (するかもしれない) 状況に適合する部分を引き出すことが重要な課題となる。

S-M 過程においては、次のような認知的シナリオの形成が中心的になる。直面している状況特徴の解釈によって、適切な自己呈示を実行するための認知的シナリオを作成する。認知的シナリオとは、特定の状況下での言語的・非言語的行動、道具的行動や、表出行動に関する一連の連鎖についての知識である。認知的シナリオの構成によって、具体的に自分の行動を計画することができる。つまり、ある特定の技能を指しているのではなく、状況情報の収集から具体的な行動の実行に至る心理学的過程総体を指している。たとえば、高 S-M 者では、状況に関する情報が“図”となり、自己の傾性に関する情報は“地”となる。適切な原型的人物イメージの形成のために、状況情報を中心とした認知的処理が行われる。ところが、低 S-M 者では、自己属性情報が“図”、状況が“地”となり、状況に適切な自己イメージの抽出処理が重要となる。

このように、Snyder が提起している S-M は、状況の中でどのような行動ができるかだけでなく、特定状況下での行動の適切な選択のための心理学的過程を含む過程概念であり、その個人のさまざまな認知的機能の働き—たとえば、帰属や適切な行動の合理的判断など—も関連するといえる。また、堀毛 (1989) が指摘するように、個人の性格を固定的に捉えるよりも、状況との対応で安定・変化する行動パターンとして性格を位置づける相互作用理論に一致する重要な概念といえよう。

セルフ・モニタリングと対人不安との関係

Leary (1983) は、その著書の中で S-M と対人不安との関係についての 1 節を設けている。他者も含めた状況のモニターは、当該状況での望ましい行動についての手がかりを与えてくれるので、自己呈示成功の主観的確率が高まるし、先述した認知的シナリオも適切に構成される可能性が高くなる。そのため、高 S-M 者ではあまり高い対人不安が生起しないと予測できる。これは、相互作用相手の反応によって自分の行動を決定しなければならない随伴的場面で顕著となるだろう。

ところが、Leary (1983) 自身が認めているように、先行研究では S-M と対人不安との間に必ず負の関係が得られているわけではない。つまり、S-M の側面によって結果が異なるのである。これは、先述した $SA = f [M \times (1 - P)]$ によっても予想できる。つまり、P の高まりは対人不安を低下させるが、高い自己呈示動機は逆に対人不安を生起させる。高 S-M 者は、適切な行動に関する状況特徴の探索と同時に、自己呈示動機も高いため、高い対人不安に陥る危険もあるかもしれない。

また、状況に応じて自分の行動を変容できるという自己能力の認知は、P を高め、その結果、対人不安の低下をもたらす。しかし、直面している (するかもしれない) 状況のモニターは、適切な状況特徴情報の収集を可能にするため、対人不安を抑制すると予測されるが、そのようなモニターが逆の結果をもたらすこともある。つまり、適切な情報を得ることができなかった場合、もともとモニターしないときよりも、P が低くなるはずである。先述したように、S-M は、一般的な対人技能概念というよりも、過程概念である。したがって、S-M という対人技能の保持が対人不安を抑制するというように一般的に捉えるのではなく、S-M のどの側面が対人不安にどのように影響を与えるかを明らかにすべきであろう。

“方法”で述べるように、Snyder (1974) は、S-M 傾向の強さを測る単一次

元尺度を作成した。しかし、後の研究 (Briggs, Cheek, & Buss, 1980 ; 岩淵・田中・中里, 1982 など) では、この尺度がいくつかの因子から構成されることが見出され、また、対人不安との関係も因子によって異なることが認められている。さらに、Lennox & Wolfe (1984) は、S-M の概念定義を狭め、自己呈示変容能力と他者の表出行動に対する敏感さの 2 下位尺度から成る改訂 S-M 尺度を作成した。したがって、ここでは、S-M と対人不安の関係を予測する際に、自己呈示変容能力と他者の表出行動に対する敏感さという側面に分けることにする。

自己呈示変容能力に富む者は、当該の状況に応じて適切な行動をとることができるので、自己呈示効率の見積もりも高くなり、さらに、現実の自己呈示も成功する可能性が高い。その結果、対人不安が生じることが少ない。他方、他者の表出行動に対する敏感さの高い者は、相互作用相手を含む状況特徴についての情報を収集することによって自己呈示効率を上昇できる。しかし、情報収集は、a) 適切な行動計画をつくれぬ、b) 計画を認知的に構成できてもそのように実行することができない、という危険も孕んでいる。この場合には、自己呈示効率が低下し、対人不安が発生することになる。したがって、S-M と対人不安との関係について、次の仮説が導かれる。

仮説 1-a S-M の自己呈示変容能力の側面と対人不安との間には有意な負の相関がある。

仮説 1-b S-M の他者の表出行動に対する敏感さの側面と対人不安の間には有意な関係がみられない。

先に指摘したように、S-M 過程は、種々の認知的機能と関連している。また、自己呈示効率の見積もりは 1 つの認知計算過程の結果といえよう。したがって、S-M と対人不安との関係は、認知活動水準とも関連すると思われる。Cacioppo & Petty (1982) は、人が思考活動に従事し、それを楽しむ傾向を認知欲求と定義した。この認知欲求は、当該個人の認知活動水準の高さを反映している。S-M が認知的過程を含むとすれば、認知欲求が高い者は、活発な S-M を営むと考えられる。その結果、対人不安にも陥りにくいだろう。したがって、次の仮説 2 が導かれる。

仮説 2 認知欲求が高い者は、強い S-M 傾向を示し、対人不安も低い。

ところで、D'Agostino & Fincher-Kiefer (1992) は、対応性バイアス (correspondence bias) が認知欲求の高い者では起こりにくいことを示した。つまり、認知欲求が高い者は、状況的拘束因にも目を向けるためバイアスが生

じにくいのである。また、Lassiter, Briggs, & Slaw (1991) によれば、認知欲求が高い者は、一貫しない行動を示す人物に直面したときには、その説明のための思考を活発に行い、その結果として一貫しない行動も正確に記憶する。

したがって、認知欲求の高い者と低い者では、S-M と対人不安との関係が異なると予想される。認知欲求が高い場合、低 S-M 者は、同時に種々の認知的機能も活性化するため、自己呈示の失敗の予想や現実の失敗が対人不安を引き起こさないかもしれない。たとえば、自己呈示の失敗を相手のせいにより（自己防衛的帰属）、対人不安を抑えることができる。高 S-M 者の場合には、S-M 過程の結果として高い自己呈示効率を見積もったとしても、活性化している他の認知的過程によってこの見積もりが低められるかもしれない。他方、認知欲求が低い者では、S-M 過程が別のさまざまな認知的機能の活性化を伴うことが少ない。そのため、S-M 過程の活性化が、そのまま対人不安の抑制をもたらす可能性が大きい。これらのことから、次の仮説が導かれる。

仮説 3-a 認知欲求が高い者では、S-M と対人不安との間に有意な関係がない。

仮説 3-b 認知欲求が低い者では、S-M と対人不安との間に有意な関係がみられる。

本調査の目的

本調査では、青年期にある女子を対象として仮説 1~3 に関する検討を行う。青年期の拡大に伴い新たな時期区分を提唱した加藤 (1987) によれば、20 歳頃の時期は、青年期中期とされ、“混乱と動揺を経て自己を再構成する時期”と特徴づけられる。また、男子に比べて女子は、対人関係を重視する傾向にある（斎藤・中村，1987）。そのため、対人関係の不具合は、心理学的に深刻な結果をもたらすと推測される。したがって、20 歳頃の女性を対象として、S-M と対人不安について検討することは、意義があると思われる。

II. 方法

質問紙の実施と被験者

調査対象者は、常葉学園富士短期大学および静岡県中部看護専門学校の女子学生である。授業を利用して（心理学，集団力学）を質問紙が実施された。常葉学園富士短期大学では、3 回にわたって実施された（1993 年 9 月 27 日，10 月 4 日，1994 年 9 月 26 日）。静岡県中部看護専門学校では、2 回にわたった（1994

年5月18日, 1995年5月17日)。短大サンプルの最初2回分と看護学校サンプルの2回分では、後述する内容の質問紙が実施された。短大の3回目の調査は、別の目的のために行われ(浅野・伊藤・神谷・渡邊, 1996参照), 後述するS-M尺度が実施されなかった。

a) 若干名含まれていた男子学生やb) 青年の年齢範囲を明らかに逸脱している者, c) 記入漏れなどの不適切な回答をした者を除外し, 残りの593名を分析対象とした(短大—1回目分: 109名; 2回目分: 121名; 3回目分: 280名/看護—1回目分: 42名; 2回目分: 41名)。なお, S-M尺度に関わる分析では, 313名が対象となる(限定サンプルと呼ぶ)。回答者の平均年齢は, 18.65歳($SD = .57$; 18~21歳, $N = 513$; 限定サンプル: $X = 18.69$, $SD = .55$, 18~20歳, $N = 313$)である。

質問紙の構成

(1) 認知欲求尺度

Cacioppo & Petty (1982) が開発した認知欲求尺度を用いて, 認知欲求の高さを測定した。彼らは, 認知欲求に関わる先行尺度項目に基づき, 45項目を作成した。これらの45項目を大学教授会メンバーと工場労働者の2群を被験者として実施し, a) 2群の被験者を弁別できるか, b) 被験者の性差に関わる効果がないか, という2点を基準に, 最終的に34項目を認知欲求尺度項目として選定した。また, 神山・藤原(1991)は, Cacioppo & Petty (1982) が作成した45項目を3つの大学生サンプルに評定させた。因子分析によって3サンプルでの因子構造が類似しており, いずれも第I因子が優勢であることから, 3サンプルで第I因子に共通して負荷量が高かった21項目が選定された。さらに, 性差がみられた項目を除き, 最終的に15項目が認知欲求尺度項目とされた。本研究では, 最初は原版45項目を用い, 後で尺度の統計的検討を行う。神山・藤原(1991)の訳を参考にしながら, これらの項目を日本語に訳し, 予備検討によってできるだけ理解しやすい表現にした。これらをTable 1に示す。

“この6ヶ月間の自分の状態にあてはまるかどうか”を基準にして, これらの45項目について4点尺度で評定させた(“4. かなりあてはまる”, “3. どちらかといえばあてはまる”, “2. どちらかといえばあてはまらない”, “1. ほとんどあてはまらない”)。認知欲求が高いほど高得点になるように得点化した。

(2) 改訂セルフ・モニタリング尺度

本研究では, S-M傾向における個人差を測定するために, Lennox & Wolfe (1984)によって作成された改訂S-M尺度を用いた。先述したように, S-M概

Table 1
認知欲求尺度（標準配列）

1. いろいろな問題の新しい解決方法を考えつくことは、ほんとうに楽しい。
2. 一生懸命に物事を考えれば、自分の人生の目標を達成できると思う。
3. 自分の知的能力を高く評価している。
4. 少し重要であってもあまり考えずにすむ課題に比べて、頭を使う困難な重要課題のほうが好きだ。
5. かなり頭を使わなければ達成できないようなことを目標にすることが多い。
6. 読んだものがよく理解できないとき、それを投げ出して忘れてしまう。*
7. 自分が考えて出した結論には自信がある。
8. 他の人が困難だと言う問題については、考えないようにする。*
9. 課題について必要以上に考えてしまう。
10. 新しい考え方を学ぶことには、あまり興味がもてない。*
11. 決定すべき何か重要なことについて考えた後でも、それを決断するのをためらってしまう。*
12. その問題が直接には自分に関係ないときでも、結局はそれについて考え込んでしまう。
13. なぜそうなるのかを理解しようとするよりも、実行してしまうほうが好きだ。*
14. 初めての慣れていない状況で考えることは、苦手だ。*
15. 出世するためには思考力がなければならないという考え方には、興味が無い。*
16. 物事を抽象的に考えることは、好きではない。*
17. 自分の知的能力は高い。
18. 一生懸命考えることや、多くの知的な努力を必要とする重要な課題を成し遂げることに、とくに満足を感じる。
19. 必要以上には考えない。*
20. さしこまれた状況では、うまく頭を働かせることができない。*
21. 一度覚えてしまえばあまり考えずにすむ課題が好きだ。*
22. 長期的な計画よりも、日々のちょっとした計画について考えるほうが好きだ。*
23. 自分の思考能力を試すようなことよりも、あまり考えずにすむことをするほうがよい。*
24. 長時間にわたって一生懸命考えることには、あまり満足できない。*
25. 考えなければならないときしか考えないほうである。*
26. 有名人のゴシップや噂話についてよりも、国際問題の原因やその可能な解決方法について、他の人と話すことが多い。
27. 現代では、知的な仕事でさえ、適当なコネがなければほとんどうまくいかないと思う。*
28. 考えすぎると間違えてしまうことがよくある。*
29. 深く考えなければ、切り抜けられないような事態に対処することには、責任を負いたくない。*
30. 自分の思考の長所や短所に気づく機会があれば、ありがたく思う。
31. 知的な努力をかなり必要とする課題をやり終えた後は、満足するよりもむしろほっと安心する。*
32. 考えることは楽しくない。*
33. 何か深く考えなければならないような状況をあらかじめ避けようとする。*
34. 自分が人生で何をすべきかについて考えるのは、好きではない。*
35. 娯楽番組よりも教育番組を見るほうが好きだ。
36. 自分で解こうと決めた問題がむずかしくても、だいたい解くことができる。
37. 知的能力が高い人が自分のまわりにいるときには、自分にもよい考えが浮かんでくる。
38. 頭を使わなければ満足できない。
39. 自分の人生は、解決しなければならない難問が多いほうがよい。
40. 簡単な問題よりも複雑な問題のほうが好きだ。
41. 問題の答えがなぜそうなるのかを理解するよりも、単に答えだけ分かるほうがよい。*
42. 問題を考えているときには、他の人が主張する解答よりも自分の解答のほうを重視する。
43. 仕事がかどっていることだけで十分であり、うまくいった過程や原因を気にとめない。*
44. 物事をあまり知らないほうがよいと思う。*
45. 自分の考えた結論が問題の結末に何の影響もおよぼさないときでも、考えることは楽しい。

＊：逆転項目

Table 2
改訂セルフ・モニタリング尺度 (標準配列)

1. まわりの人が望んでいることに応じて、自分の行動を変えることができる。
2. 目をみれば、その人のほんとうの気持ちを正確に読み取ることができる。
3. 相手にどのような印象でも与えることができる。
4. 話をしているときには、相手の表情のわずかな変化にも敏感になる。
5. 私の直感力は、相手の気持や行いの原因を知るのにとっても役に立つ。
6. 相手が冗談を聴いて笑っても、内心ではその冗談を下品であると思っているかどうかを見抜くことができる。
7. 物事が自分の思い通りにうまくいかないときには、すぐに他のやり方に切り換えることができる。
8. 目をみれば、自分が相手に何か不都合なことを言ったかどうか分かる。
9. 相手や状況に応じて自分の行動を変えるのが苦手である。*
10. 自分が今いる場面で必要とされていることに応じて、自分の行動を変えることができる。
11. だれかが自分にうそをついても、表情やしぐさですぐにうそだと見抜くことができる。
12. 自分のためになると分かっているにもかかわらず、体裁をよくするのが苦手である。*
13. その場面でどのようにふるまえばよいか分かれば、それに応じて、自分の行動をたやすく変えることができる。

*: 逆転項目

念は, Snyder (1974) によって提起された。Snyder は, S-M における個人差を測定する単一次元尺度も作成した。しかし, この尺度に関して, Briggs *et al.* (1980) や岩淵ら (1982) は, 因子分析によって, 外向性, 他者指向性, および演技性の 3 因子を抽出した (両研究で因子構成項目に多少差異がある)。また, Gabrenya & Arkin (1980) は, 芝居演技能力, 社交性-社会的不安, 他者指向性, および談話能力の 4 因子を得た。

Lennox & Wolfe (1984) は, a) S-M 尺度で抽出された因子が Snyder (1974) によってもともと設定された先述の 5 内容領域に対応していない, b) S-M の適応的な定義に矛盾する結果がある一たとえば, Briggs *et al.* (1980) の研究では, 内気さは外向性因子と負の関係にあるのに他者指向性因子とは正の関係にある一, という理由で原尺度に疑問を投げかけ, 5 内容領域に対応させて項目の追加・削除による検討を加えた。しかし, Snyder が設定した先述の内容領域のうち, a), b), c) などに関連する項目から成る下位尺度は, 適応の指標となる測度との関係から, 適応的概念と一致しているとは認められなかった。結局, 彼らは, S-M の概念定義を狭め, 自己呈示変容能力と他者の表出行動に対する敏感さの 2 下位尺度から成る改訂 S-M 尺度を作成した。諸井 (1995) は, 孤独感研究の中でこの改訂尺度を用い, 2 因子を得た。また, 石原・水野 (1992)

もこれらの2因子が現れたことを報告している。

以上の理由から、本研究では、Lennox & Wolfe (1984) による改訂尺度を用いることにした。諸井 (1995) の日本語訳をさらに吟味して理解し易い表現にした。これらの13項目を Table 2 に示す。

これらの13項目それぞれについて、“この6ヶ月間の自分の状態にあてはまるかどうか”を、4点尺度で評定させた(“4.かなりあてはまる”～“1.ほとんどあてはまらない”)。S-M 傾向が強いほど高得点になるようにした。

(3)対人不安尺度

対人不安を測定するために、林・小川 (1981) によって開発された対人関係質問票の項目に修正を加え、39項目から成る対人不安尺度を作成した。林・小川による対人関係質問票は、次のようにして開発された。まず、a)大学生や対人恐怖症者(実際に通院・入院)による自由記述、b)対人恐怖症者の面接記録、c)既存の性格検査項目に基づき、対人不安項目が収集された。これらの445項目について大学生と対人恐怖症者に評定させ、平均値に有意差が現れた335項目の中から、項目内容や相互相関の高さを考慮して、117項目を残し、これらが対人不安質問票項目とされた。さらに、因子分析によって、66項目に絞り、対人関係質問票とした。

しかし、この対人関係質問票には、次のような問題点がある。a)対人場面に関わる不安を直接に反映していないと思われる項目も含まれている。b)構成項目の表現方向がすべて正方向である。

a)については、対人関係質問票を構成する因子のうち、5個の因子は対人場面と直接に関係していないと判断できる。“V. 自分に満足できない悩み(「5.根気がなく、何事にも長続きしない」など)”、“VI. 気分が動揺する悩み(「6.感情的すぎる」など)”、“VIII. ささいなことを気に病む悩み(「44.小心である」など)”、“IX. 生きている充実感がない悩み(「45.将来の自分には、あまり期待が持てない」など)”、“X. 気分のすぐれない悩み(「46.いつも頭が重い」など)”(項目番号は対人関係質問票による)。a)の問題は、項目収集と選定の過程によって生じたと考えられる。つまり、対人不安に悩んでいる者は、対人不安に関連したさまざまな併存的症状も抱えているはずであり、尺度項目選定の過程で併存的症状に関する項目も残ったと思われる。したがって、対人不安の程度を測定するという目的からすると、そのような項目は除去すべきであると考えられる。

b)については、尺度作成の過程で、すべての項目が対人不安方向に表現され

Table 3
対人不安尺度 (標準配列)

1. 近所の人に自分がどのように思われているか、気にしたことがない。*
2. 職場・学校のクラス・近所の人に自分がどのように思われているのか気になる。
3. 集団の中に溶け込めない。
4. おおぜいの人がいると、自分が圧倒されてしまうような感じがする。
5. 人との交際が得意なほうである。*
6. 人の目を見るのがとてもつらい。
7. 自分は、まわりから変な人に思われている。
8. 自分のことがまわりの人に知られているような感じがして、思うようにふるまえない。
9. 話をしているときに表情を豊かにできる。*
10. グループでのつき合いが苦手である。
11. おおぜいの人の前でも、落ち着いていられる。*
12. 知っている人を見かけても、顔をあわせないように道を避けてしまう。
13. 顔をじっと見られても平気である。*
14. つきあいの長い友人と話をするときも、緊張がとれない。
15. 自分のことが他の人に知られるのではないか、と気にかけることはない。*
16. 人と会うとき、自分の顔つきが気になる。
17. 人と自然につきあえない。
18. おおぜいの人と向かいあって話しても、苦にならない。*
19. 友人と一緒にいるとき、顔がこわばったり、赤くなったり、緊張したりする。
20. 人と目をあわせても苦にならない。*
21. 相手にいやな感じを与えるような気がして、相手の顔色をうかがってしまう。
22. 人と会うときに、自分の顔つきや目つきが悪い印象を与えるのではないかと不安になる。
23. 自分が相手の人にいやな感じを与えることはないと思う。*
24. おおぜいの人がいると、うまく会話の中に入っていけない。
25. 人がたくさんいるところでは、気はずかしくて話せない。
26. だれかと二人きりになっても、相手を特別に意識せず自然にしていられる。*
27. 人と話をするとき、目をどこへもつていけばよいか、わからない。
28. 知らない人からの視線が気になったことはない。*
29. 友人が自分を避けているような気がする。
30. 他人が自分をどのように思っているのか、気にとめない。*
31. 対人関係がぎこちない。
32. 会議などで発言が困難になる。
33. むかいあって仕事をしているとき、相手に顔を見られるのがつらい。
34. 自分が人どう見られているのか、くよくよ考えてしまう。
35. 多人数の雰囲気、すぐ溶け込める。*
36. 人前に出ると、おどおどしてしまう。
37. 知らない人より知っている人と会うときのほうが緊張する。
38. 仲間の中に溶け込んでいる。*
39. 人前でぎこちない自分をさらけ出すのがつらい。

*: 逆転項目

ている。これは、黙従反応を抑制するという観点からすると望ましくない。また、同一方向への表現は、項目内容への注意を散漫にするかもしれない。したがって、表現方向を逆転させた項目も含める必要がある。

以上のことを踏まえ、先の5因子の構成項目を除き、残りの39項目を用いることとした。さらに、この39項目のほぼ3分の1の項目について、意味内容を変化させずに表現方向を逆転した。作成した項目を予備検討し、より理解しやすい表現にした。これらをTable 3に示す。

これらの39項目のそれぞれが“この6ヶ月間の自分の状態にあてはまるかどうか”を、4点尺度を用いて評定させた(“4.かなりあてはまる”～“1.ほとんどあてはまらない”)。得点は、対人不安が高いほど高得点になるようにした。

III. 結果

尺度の検討

認知欲求尺度および対人不安尺度では、593名を対象に尺度が検討され、S-M尺度では、313名が対象とされた。

(1) 認知欲求尺度

Cacioppo & Petty (1982) が開発した認知欲求尺度は、もともと単一次元尺度として構成されており、本研究でもそれに従った分析を行った。

① 全体分析

最初に、a) 評定が全体的に高認知欲求方向(3.5)あるいは低認知欲求方向(1.5)に偏っていないか、b) 評定値の分散が小さくないか、という2点について検討した。その結果、5項目(項目3, 26, 30, 35, 44)が排除された。次に、残りの40項目を対象に主成分分析によって未回転第I主成分の負荷量を調べ、.300を下回る項目を排除して、同様の分析を繰り返した。その結果、27項目を対象とした3回目の主成分分析では、すべての負荷量が.300を上回った。これら27項目について、項目-全体得点相関分析とGP分析を実施した。前者の分析では、当該項目の得点が残りの項目の合計得点との間に有意な相関がみられることが27項目すべてで確認され、GP分析でも各項目の弁別性が得られた。また、27項目での α 係数も十分に高かった。したがって、27項目の得点の単純平均値を認知欲求得点とした。尺度平均値は、2.45であり、尺度中性点よりも少し低かった($t=3.24$, $df=592$, $p=.001$)。また、尺度得点の分布は正規型と判断できる。これらの尺度検討の結果をTable 4に示す。

Table 4

認知欲求尺度の単一次元性の検討：
主成分分析における未回転第 I 主成分負荷量を基準とする項目選別

	平均値 (SD)	(第 I 主成分負荷量)				項目-全体(A)		GP 分析(B)		t 検定(C)
		1 回目	2 回目	3 回目	得点相関	下位群	上位群	t		
		平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)			
NC1	2.72(.86)	.478	.479	.480	.410	2.21(.89)	3.22(.74)	t=10.86, df=301.16		
NC2	2.87(.85)	.279	****	****	****					
NC3	1.89(.68)x	****	****	****	****					
NC4	1.88(.79)	.625	.631	.628	.561	1.39(.55)	2.56(.84)	t=14.50, df=263.27		
NC5	2.05(.85)	.484	.481	.478	.414	1.57(.75)	2.56(.86)	t=10.91, df=300.82		
NC6	2.55(.90)	.395	.400	.400	.346	1.99(.82)	2.96(.87)	t=10.14, df=309		
NC7	2.55(.77)	.307	.295	****	****					
NC8	2.60(.76)	.559	.559	.559	.498	2.03(.74)	3.10(.60)	t=13.97, df=299.26		
NC9	2.61(.88)	.416	.420	.422	.361	2.16(.85)	3.05(.85)	t= 9.23, df=309		
NC10	2.98(.74)	.568	.573	.572	.511	2.46(.75)	3.51(.56)	t=13.99, df=289.92		
NC11	2.07(.85)	.103	****	****	****					
NC12	2.73(.84)	.267	****	****	****					
NC13	2.41(.92)	.114	****	****	****					
NC14	2.03(.84)	.328	.318	.312	.258	1.75(.75)	2.41(.95)	t= 6.84, df=291.14		
NC15	2.79(.85)	.252	****	****	****					
NC16	2.49(.79)	.162	****	****	****					
NC17	1.89(.70)	.333	.323	.313	.265	1.59(.65)	2.14(.73)	t= 7.12, df=309		
NC18	2.90(.84)	.447	.449	.451	.394	2.46(.92)	3.36(.67)	t= 9.98, df=284.76		
NC19	2.60(.93)	.469	.474	.480	.425	2.00(.91)	3.11(.81)	t=11.32, df=309		
NC20	2.21(.84)	.269	****	****	****					
NC21	1.89(.78)	.362	.363	.366	.304	1.56(.65)	2.26(.87)	t= 8.01, df=284.10		
NC22	2.04(.89)	.234	****	****	****					
NC23	2.34(.81)	.602	.608	.609	.538	1.73(.65)	2.97(.70)	t=16.28, df=309		
NC24	2.54(.83)	.491	.490	.500	.438	2.03(.81)	3.10(.73)	t=12.21, df=309		
NC25	2.44(.98)	.542	.544	.551	.493	1.69(.79)	3.05(.88)	t=14.35, df=309		
NC26	1.53(.74)a1	****	****	****	****					
NC27	2.14(.87)	.127	****	****	****					
NC28	2.06(.83)	.065	****	****	****					
NC29	2.16(.79)	.470	.468	.469	.412	1.68(.67)	2.62(.80)	t=11.15, df=297.51		
NC30	3.56(.60)x, a2	****	****	****	****					
NC31	1.89(.87)	.260	****	****	****					
NC32	3.01(.77)	.509	.514	.513	.444	2.57(.79)	3.53(.65)	t=11.82, df=300.14		
NC33	2.49(.79)	.588	.596	.598	.535	1.93(.65)	3.09(.72)	t=14.95, df=309		
NC34	2.95(.85)	.440	.438	.435	.377	2.56(.91)	3.45(.66)	t= 9.89, df=284.38		
NC35	1.53(.67)x, a3	****	****	****	****					
NC36	2.28(.75)	.499	.501	.497	.435	1.88(.74)	2.77(.67)	t=11.17, df=309		
NC37	2.51(.88)	.424	.423	.419	.358	2.08(.82)	2.94(.93)	t= 8.70, df=309		
NC38	2.08(.75)	.592	.591	.590	.521	1.57(.58)	2.59(.72)	t=13.72, df=293.23		
NC39	2.20(.85)	.369	.383	.388	.328	1.86(.85)	2.66(.88)	t= 8.18, df=309		

Table 4 のつづき

	平均値(SD)	〔第 I 主成分負荷量〕 項目-全体(A)				GP 分析(B)		t 検定(C)
		1 回目	2 回目	3 回目	得点相関	下位群	上位群	
		平均値(SD)		平均値(SD)				
NC40	1.90(.82)	.622	.635	.638	.564	1.39(.63)	2.58(.81)	$t=14.32, df=287.51$
NC41	2.97(.94)	.464	.462	.463	.404	2.41(1.11)	3.46(.64)	$t=10.22, df=249.91$
NC42	2.52(.79)	.166	****	****	****			
NC43	2.89(.83)	.344	.353	.357	.312	2.50(.90)	3.29(.75)	$t=8.37, df=301.23$
NC44	3.49(.71) ^{a4}	****	****	****	****			
NC45	2.63(.84)	.506	.512	.509	.445	2.15(.79)	3.18(.76)	$t=11.60, df=309$
初期主成分固有値	1	6.994	6.551	6.477	α 係数 = .872			
	2	2.379	1.800	1.716	平均値(SD) : 2.45(.40)			
	3	1.947	1.360	1.351	尖度 : .512			
	4	1.612	1.308	1.295	歪度 : .184			
	5	1.368	1.276	1.212	正規性の検定 : $z=1.190, p=.118$			
	6	1.247	1.095	1.051				
	7	1.212	1.016	1.007				
	8	1.147						
	9	1.103						
	10	1.068						
	11	1.041						
	12	1.006						
第 I 主成分説明率		17.5%	23.4%	24.0%				

$N=593$

x : 標準偏差値 < .70

a1 : 対1.5点 : $t=.86, df=592, ns.$

a2 : 対3.5点 : $t=2.63, df=592, p=.009$

a3 : 対1.5点 : $t=1.07, df=592, ns.$

a4 : 対3.5点 : $t=-.32, df=592, ns.$

(A) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(B) : 下位群33~59点 ($N=157$) ; 上位群73~102点 ($N=154$)

(C) : すべて $p=.001$

なお, 本研究で選定された 27 項目のうち 20 項目が Cacioppo & Petty (1982) による 34 項目に含まれており, 7 項目が彼らによって削除された項目であった。また, 神山・藤原 (1991) による 15 項目は, 本研究の 27 項目にすべて含まれていた。

②限定分析

313 名に限定して, 尺度の単一次元性の検討を行った。これらの結果を Appendix 1 に示す。

(2)セルフ・モニタリング尺度

本研究では, Lennox & Wolfe (1984) によって作成された改訂 S-M 尺度を

Table 5-a

改訂セルフ・モニタリング尺度に関する主成分分析
(斜交回転, 直接 oblimin 法, $\delta=0$)の結果: 因子パターンマトリックス負荷量

	平均値(SD)	- 1 回目 -		- 2 回目 -	
		I	II	I	II
〔 I . 他者の表出行動に対する敏感さ〕					
2. 目をみれば, その人のほんとうの気持ちを正確に読み取ることができる。	2.52(.72)	.799	-.009	.795	.013
4. 話をしているときには, 相手の表情のわずかな変化にも敏感になる。	3.08(.73)	.733	-.022	.734	.014
5. 私の直感力は, 相手の気持ちや行いの原因を知るのにとっても役に立つ。	2.49(.78)	.781	-.008	.768	.027
6. 相手が冗談を聴いて笑っても, 内心ではその冗談を下品であると思っているかどうかを見抜くことができる。	2.33(.77)	.666	.070	.666	.067
8. 目をみれば, 自分が相手に何か不都合なことを言ったかどうか分かる。	3.08(.68)	.731	-.004	.737	.004
11. だれかが自分にうそをついても, 表情やしぐさですぐにうそだと見抜くことができる。	2.62(.73)	.695	-.055	.707	-.054
〔 II . 自己呈示変容能力〕					
1. まわりの人が望んでいることに応じて, 自分の行動を変えることができる。	2.90(.68)	.131	.618	.150	.627
3. 相手にどのような印象でも与えることができる。	2.37(.76)	.555	.257	****	****
7. 物事が自分の思い通りにうまくいかないときには, すぐに他のやり方に切り換えることができる。	2.54(.69)	.069	.319	****	****
9. 相手や状況に応じて自分の行動を変えるのが苦手である。	2.81(.82)	.036	.744	.057	.754
10. 自分が今いる場面で必要とされていることに応じて, 自分の行動を変えることができる。	2.93(.64)	.152	.681	.168	.693
12. 自分のためになると分かっても, 体裁をよくするのが苦手である。	2.38(.72)	-.221	.661	-.200	.643
13. その場面でのようにふるまえばよいか分かれば, それに応じて, 自分の行動をたやすく変えることができる。	2.74(.75)	-.003	.722	.021	.716

主成分間相関	I	1.000		1.000	
	II	.334	1.000	.291	1.000

N=313

<1 回目>初期固有値 ≥ 1.814 初期説明率 48.6%

<2 回目>初期固有値 ≥ 1.794 初期説明率 53.0%

Table 5-b
セルフ・モニタリング下位尺度の単一次元性の検討

	第 I 主成分 項目-全体(A)			GP 分析(B)			t 検定(C)
	平均値(SD)	負荷量	得点相関	下位群	上位群		
				平均値(SD)	平均値(SD)		
(I. 他者の表出行動に対する敏感さ)							
SM2	2.52(.72)	.801	.681	1.92(.51)	3.13(.52)	$t=16.78$	$df=201$
SM4	3.08(.73)	.744	.610	2.44(.69)	3.66(.48)	$t=14.62$	$df=173.08$
SM5	2.49(.78)	.776	.648	1.83(.48)	3.20(.60)	$t=18.18$	$df=194.85$
SM6	2.33(.77)	.688	.553	1.80(.57)	2.92(.72)	$t=12.37$	$df=194.74$
SM8	3.08(.68)	.737	.603	2.56(.64)	3.60(.49)	$t=12.90$	$df=183.75$
SM11	2.62(.73)	.694	.557	2.02(.55)	3.14(.60)	$t=13.89$	$df=201$

初期主成分固有値	1	3.297	α 係数 = .834				
第 I 主成分説明率	54.9%		平均値(SD) : 2.69(.54)				
			尖度 : .316				
			歪度 : -.026				
			正規性の検定 : $z=1.372, p=.046$				

$N=313$

(A) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(B) : 下位群 7~14点 ($N=99$) ; 上位群 18~24点 ($N=104$)

(C) : すべて $p=.001$

	第 I 主成分 項目-全体(D)			GP 分析(E)			t 検定(F)
	平均値(SD)	負荷量	得点相関	下位群	上位群		
				平均値(SD)	平均値(SD)		
(II. 自己呈示変容能力)							
SM1	2.90(.68)	.691	.489	2.35(.65)	3.30(.51)	$t=11.65$	$df=166.69$
SM9	2.81(.82)	.776	.582	2.00(.65)	3.42(.59)	$t=16.94$	$df=215$
SM10	2.93(.64)	.768	.572	2.39(.65)	3.34(.51)	$t=11.72$	$df=167.75$
SM12	2.38(.72)	.532	.355	1.96(.63)	2.79(.66)	$t=9.38$	$df=215$
SM13	2.74(.75)	.724	.524	2.10(.65)	3.27(.54)	$t=14.11$	$df=175.52$

初期主成分固有値	1	2.476	α 係数 = .738				
第 I 主成分説明率	49.5%		平均値(SD) : 2.75(.51)				
			尖度 : .495				
			歪度 : -.146				
			正規性の検定 : $z=1.783, p=.003$				

$N=313$

(D) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(E) : 下位群 6~12点 ($N=92$) ; 上位群 15~20点 ($N=125$)

(F) : すべて $p=.001$

用いた。この尺度は、“自己呈示変容能力”と“他者の表出行動に対する敏感さ”という2つの下位尺度から構成される。そこで、本分析でも、13項目を対象に主成分分析(斜交回転、直接 *oblimin* 法、 $\delta=0$)を行い、2主成分解を求めた。Table 5-a に示すように、第 I 主成分には“他者の表出行動に対する敏感さ”下位尺度、第 II 主成分には“自己呈示変容能力”下位尺度にそれぞれ属する項目の負荷量がおおむね高かった。ただし、a) “自己呈示変容能力”下位尺度に含まれる項目 3 が第 I 主成分への大きな負荷を示している、b) 項目 7 が大きな負荷をみせない、という点で、Lennox & Wolfe による結果と異なっていた。そこで、これら 2 項目を除く 11 項目で主成分分析(斜交回転、直接 *oblimin* 法、 $\delta=0$)を実施したところ、もともと想定される項目が適切な負荷を示す解が得られた。そこで、負荷量の高い項目をそれぞれの下位尺度項目とした。

それぞれの尺度ごとに、主成分分析での第 I 主成分負荷量の検討、項目-相関分析、および GP 分析を行った。これらの結果を Table 5-b に表す。いずれの分析でも良好な結果が示され、 α 係数についても十分な値が得られた。したがって、項目 2, 4, 5, 6, 8, 11 の単純平均値を他者の表出行動に対する敏感さ得点とし、項目 1, 9, 10, 12, 13 の単純平均値を自己呈示変容能力得点とした。

尺度平均値は、それぞれ 2.69, 2.75 であり、尺度中性点 (2.5) よりも有意に高かった ($t=6.10$, $df=312$, $p=.001$; $t=8.79$, $df=312$, $p=.001$)。これは、調査対象者の状態(少なくとも当該の学校に通学している)からすれば、予想できる結果である。また、自己呈示変容能力得点のほうが他者の表出行動に対する敏感さ得点よりも少し高い傾向性がみられた ($t=1.89$, $df=312$, $p=.059$)。尺度得点分布については、いずれの下位尺度も正規分布とは異なり、正規分布よりも尖った分布であった。

(3) 対人不安尺度

① 全体分析

1) 尺度の単一次元性の検討

対人不安が単一次元的現象であると仮定して、対人不安尺度の単一次元性の検討を行った。

まず、a) 評定が全体的に高不安方向 (3.5) あるいは低不安方向 (1.5) に偏っていないか、b) 評定値の分散が小さくないか、という 2 点について検討した。その結果、3 項目 (項目 14, 37, 38) が排除された。次に、残りの 36 項目を対象に主成分分析を行い、未回転第 I 主成分への負荷量の高さをみた。5 項目 (1, 7, 15, 23, 28) で負荷量が .300 を下回った。残りの 31 項目について同様に主

Table 6-a

対人不安尺度の単一次元性の検討：
主成分分析における未回転第 I 主成分負荷量を基準とする項目選別

	(第 I 主成分負荷量)					GP 分析(B)		<i>t</i> 検定(C)
	平均値(SD)	1 回目	2 回目	項目-全体(A) 得点相関	下位群 上位群			
					平均値(SD)	平均値(SD)		
ANX1	2.62(.88)	.277	****	****				
ANX2	3.06(.78)	.325	.309	.298	2.75(.93)	3.46(.59)	<i>t</i> = 7.98, <i>df</i> = 254.00	
ANX3	2.11(.81)	.627	.637	.566	1.52(.68)	2.69(.74)	<i>t</i> = 14.52, <i>df</i> = 306	
ANX4	2.51(.84)	.615	.616	.570	1.78(.73)	3.05(.67)	<i>t</i> = 15.94, <i>df</i> = 306	
ANX5	2.41(.79)	.671	.680	.615	1.76(.69)	3.04(.62)	<i>t</i> = 17.11, <i>df</i> = 306	
ANX6	1.80(.79)	.569	.572	.530	1.26(.50)	2.40(.88)	<i>t</i> = 14.05, <i>df</i> = 249.58	
ANX7	2.22(.80)	.279	****	****				
ANX8	1.95(.73)	.601	.592	.555	1.38(.58)	2.47(.70)	<i>t</i> = 14.79, <i>df</i> = 298.50	
ANX9	2.04(.80)	.480	.492	.438	1.49(.62)	2.47(.78)	<i>t</i> = 12.23, <i>df</i> = 295.56	
ANX10	2.01(.85)	.523	.526	.459	1.49(.71)	2.55(.83)	<i>t</i> = 12.12, <i>df</i> = 302.19	
ANX11	2.59(.87)	.544	.546	.501	1.98(.83)	3.14(.76)	<i>t</i> = 12.85, <i>df</i> = 306	
ANX12	2.09(.79)	.476	.475	.428	1.65(.70)	2.52(.78)	<i>t</i> = 10.35, <i>df</i> = 306	
ANX13	2.80(.91)	.522	.519	.485	2.17(.91)	3.45(.71)	<i>t</i> = 13.77, <i>df</i> = 284.47	
ANX14	1.32(.60)x, a1	****	****	****				
ANX15	2.57(.90)	.287	****	****				
ANX16	2.48(.96)	.450	.443	.421	1.89(.97)	3.03(.74)	<i>t</i> = 11.44, <i>df</i> = 280.24	
ANX17	1.82(.82)	.647	.653	.597	1.23(.48)	2.50(.84)	<i>t</i> = 16.34, <i>df</i> = 248.71	
ANX18	2.57(.91)	.586	.585	.536	1.86(.89)	3.22(.68)	<i>t</i> = 14.99, <i>df</i> = 281.59	
ANX19	1.77(.81)	.394	.392	.357	1.34(.65)	2.15(.82)	<i>t</i> = 9.69, <i>df</i> = 295.92	
ANX20	2.20(.95)	.446	.442	.404	1.65(.99)	2.75(.82)	<i>t</i> = 10.56, <i>df</i> = 292.07	
ANX21	2.77(.85)	.494	.490	.470	2.23(.91)	3.25(.70)	<i>t</i> = 11.00, <i>df</i> = 282.34	
ANX22	2.45(.96)	.541	.536	.514	1.72(.87)	3.03(.83)	<i>t</i> = 13.42, <i>df</i> = 306	
ANX23	2.71(.72)	.284	****	****				
ANX24	2.45(.81)	.661	.671	.611	1.76(.71)	3.08(.62)	<i>t</i> = 17.43, <i>df</i> = 306	
ANX25	2.37(.85)	.601	.614	.555	1.65(.68)	2.94(.80)	<i>t</i> = 15.30, <i>df</i> = 301.14	
ANX26	2.26(.84)	.539	.533	.492	1.72(.78)	2.80(.78)	<i>t</i> = 12.16, <i>df</i> = 306	
ANX27	2.04(.90)	.572	.572	.535	1.44(.62)	2.75(.91)	<i>t</i> = 14.71, <i>df</i> = 275.21	
ANX28	2.97(.76)	.247	****	****				
ANX29	1.76(.71)	.512	.504	.465	1.30(.52)	2.20(.79)	<i>t</i> = 11.86, <i>df</i> = 269.87	
ANX30	3.16(.78)	.342	.323	.309	2.79(.91)	3.54(.63)	<i>t</i> = 8.28, <i>df</i> = 264.50	

成分分析を再度行ったが、いずれの項目の負荷量も.300を上回っていた。これら 31 項目が対人不安尺度の構成項目であるとし、項目-全体得点相関分析と GP 分析を実施した。前者の分析ではいずれの項目も有意な相関値が現れ、項目の等質性が示された。また、GP 分析でも各項目の弁別性が確認された。さらに、これら 31 項目での α 係数も高かった。したがって、これら 31 項目での単一次元性は十分に保証されたといえ、31 項目での評定平均値を全体的対人不安得点

Table 6-a のつづき

	平均値(SD)	(第I主成分負荷量)			GP分析(B)		
		1回目	2回目	項目-全体(A)	下位群	上位群	t検定(C)
		得点相関			平均値(SD)	平均値(SD)	
ANX31	1.91(.78)	.563	.564	.506	1.40(.57)	2.43(.80)	$t=13.12, df=281.04$
ANX32	2.64(.91)	.522	.528	.486	2.03(.87)	3.18(.78)	$t=12.30, df=306$
ANX33	2.10(.87)	.584	.588	.553	1.43(.61)	2.71(.89)	$t=14.90, df=276.73$
ANX34	2.54(.95)	.527	.516	.496	1.91(.91)	3.19(.74)	$t=13.47, df=289.83$
ANX35	2.34(.80)	.670	.682	.616	1.71(.70)	3.00(.66)	$t=16.68, df=306$
ANX36	2.51(.86)	.687	.695	.653	1.70(.69)	3.18(.62)	$t=19.86, df=306$
ANX37	1.57(.68)x	****	****	****			
ANX38	1.82(.69)x	****	****	****			
ANX39	2.68(.90)	.526	.530	.495	2.05(.97)	3.27(.67)	$t=12.88, df=265.46$
初期主成分固有値	1	9.745	9.411	α 係数=.920			
	2	2.687	2.448	平均値(SD): 2.33(.46)			
	3	1.794	1.747	尖度:.043			
	4	1.714	1.534	歪度:-.042			
	5	1.408	1.158	正規性の検定: $z=1.014, p=.255$			
	6	1.178	1.006				
	7	1.043					
	8	1.017					
第I主成分説明率		27.1%	30.4%				

N=593

x:標準偏差値<.70

a1:対1.5点; $t=-7.29, df=592, p=.001$ (A):当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関,すべて $p=.001$

(B):下位群 35~63点(N=151);上位群 81~116点(N=157)

(C):すべて $p=.001$

とした。尺度平均値は、2.33であり、尺度中性点(2.5)よりも有意に低かった($t=9.04, df=592, p=.001$)。これは、調査対象者の状態(少なくとも当該の学校に通学している)を考えれば、当然であろう。また、尺度得点の分布は正規分布を示した。これらの結果を Table 6-a に示す。

2) 尺度の因子構造

先の検討で選定された31項目を対象として、主成分分析(斜交回転, 直接 *oblimin* 法, $\delta=0$)を行った。固有値1.00を満たす各解を検討し、最も明確で解釈可能な解を求めた。その結果、4主成分解が最も適切であった。各主成分への負荷量が小さい項目を除去し、再度主成分分析を実施した。その結果を Table 6-b-1 に示す。

第I主成分は、不特定多数の人々との相互作用に伴う不安を表す項目での負

Table 6-b-1

対人不安尺度に関する主成分分析(斜交回転, 直接 oblimin 法, $\delta=0$)の結果:
因子パターンマトリックス負荷量

	I	II	III	IV	
〔第Ⅰ因子：聴衆不安〕					
25. 人がたくさんいるところでは、気はずかしくて話せない。	.768	.032	.012	-.010	
24. おおぜいの人がいると、うまく会話の中に入っていけない。	.706	-.012	.077	.243	
35. 多人数の雰囲気、すぐ溶け込める。	.672	-.102	-.013	.278	
36. 人前に出ると、おどおどしてしまう。	.593	.207	-.183	-.026	
11. おおぜいの人の前でも、落ち着いていられる。	.591	.130	-.073	-.069	
5. 人との交際が得意なほうである。	.566	-.088	-.032	.364	
18. おおぜいの人と向かいあって話しても、苦にならない。	.555	-.074	-.247	.028	
4. おおぜいの人がいると、自分が圧倒されてしまうような感じがする。	.510	.217	-.045	.088	
32. 会議などで発言が困難になる。	.510	.215	-.084	-.074	
〔第Ⅱ因子：自己呈示不安〕					
34. 自分が人にどう見られているのか、くよくよ考えてしまう。	-.019	.727	-.027	.163	
21. 相手にいやな感じを与えるような気がして、相手の顔色をうかがってしまう。	.062	.660	-.070	.045	
2. 職場・学校のクラス・近所の人に自分がどのように思われているのか気になる。	.086	.655	.122	-.066	
30. 他人が自分をどのように思っているのか、気にとめない。	.120	.642	.090	-.095	
22. 人と会うときに、自分の顔つきや目つきが悪い印象を与えるのではないかと不安になる。	.051	.642	-.130	.070	
16. 人と会うとき、自分の顔つきが気になる。	-.070	.530	-.154	.144	
〔第Ⅲ因子：視線恐怖〕					
6. 人の目を見るのがとてもつらい。	-.049	-.061	-.828	.123	
27. 人と話をするとき、目をどこへもってあげればよいか、わからない。	-.057	.075	-.755	.097	
20. 人と目をあわせても苦(く)にならない。	.073	-.128	-.722	-.051	
13. 顔をじっと見られても平気である。	.225	.034	-.642	-.168	
33. むかいあって仕事をしているとき、相手に顔を見られるのがつらい。	.051	.167	-.613	.060	
〔第Ⅳ因子：対人技能不安〕					
31. 対人関係がぎこちない。	.084	.058	.060	.731	
17. 人と自然につきあえない。	.195	.021	-.019	.675	
10. グループでのつき合いが苦手である。	.263	-.177	.047	.642	
29. 友人が自分を避けているような気がする。	-.156	.241	-.089	.632	
8. 自分のことがまわりの人に知られているような感じがして、思うようにふるまえない。	-.081	.291	-.231	.486	
12. 知っている人を見かけても、顔をあわせないように道を避けてしまう。	.119	-.031	-.116	.454	

主成分相関	I	1.000			
	II	.268	1.000		
	III	-.376	-.290	1.000	
	IV	.363	.206	-.315	1.000

N = 593

初期固有値 ≥ 8.141 初期説明率 31.3%

Table 6-b-2
対人不安下位尺度の単一次元性の検討

	第 I 主成分 項目-全体(A)			GP 分析(B)			t 検定(C)
	平均値(SD)	負荷量	得点相関	下位群	上位群		
				平均値(SD)	平均値(SD)		
[I . 聴衆不安]							
ANX25	2.37(.85)	.750	.653	1.58(.59)	3.06(.72)	$t=20.77$	$df=332.21$
ANX24	2.45(.81)	.768	.668	1.71(.62)	3.13(.54)	$t=22.39$	$df=322.17$
ANX35	2.34(.80)	.767	.667	1.63(.61)	3.06(.60)	$t=21.70$	$df=337$
ANX5	2.41(.79)	.728	.627	1.71(.64)	3.06(.55)	$t=20.90$	$df=318.32$
ANX11	2.59(.87)	.624	.529	1.84(.71)	3.21(.70)	$t=17.78$	$df=337$
ANX36	2.51(.86)	.751	.669	1.68(.63)	3.24(.56)	$t=24.32$	$df=337$
ANX18	2.57(.91)	.652	.556	1.80(.82)	3.23(.65)	$t=17.74$	$df=306.14$
ANX4	2.51(.84)	.660	.562	1.77(.73)	3.08(.68)	$t=17.16$	$df=337$
ANX32	2.64(.91)	.590	.495	1.93(.75)	3.28(.75)	$t=16.52$	$df=337$
初期主成分固有値	1	4.432	α 係数 = .868				
第 I 主成分説明率	49.2%	平均値(SD) : 2.49(.59)					
尖度 : -.104							
歪度 : -.299							
正規性の検定 : $z=1.701, p=.006$							

$N=313$

(A) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(B) : 下位群 9~19点 ($N=162$) ; 上位群 26~36点 ($N=177$)

(C) : すべて $p=.001$

	第 I 主成分 項目-全体(D)			GP 分析(E)			t 検定(F)
	平均値(SD)	負荷量	得点相関	下位群	上位群		
				平均値(SD)	平均値(SD)		
[II . 自己呈示不安]							
ANX34	2.54(.95)	.762	.603	1.69(.66)	3.44(.67)	$t=23.99$	$df=331$
ANX21	2.77(.85)	.739	.578	1.95(.74)	3.46(.57)	$t=20.89$	$df=301.84$
ANX22	2.45(.96)	.763	.611	1.49(.61)	3.27(.72)	$t=24.31$	$df=327.52$
ANX2	3.06(.78)	.608	.447	2.51(.82)	3.58(.62)	$t=13.31$	$df=299.69$
ANX30	3.16(.78)	.616	.449	2.59(.79)	3.78(.48)	$t=16.50$	$df=264.79$
ANX16	2.48(.96)	.635	.472	1.65(.79)	3.20(.73)	$t=18.64$	$df=331$
初期主成分固有値	1	2.862	α 係数 = .779				
第 I 主成分説明率	47.7%	平均値(SD) : 2.75(.61)					
尖度 : -.208							
歪度 : -.221							
正規性の検定 : $z=1.739, p=.005$							

$N=313$

(D) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(E) : 下位群 7~14点 ($N=162$) ; 上位群 19~24点 ($N=171$)

(F) : すべて $p=.001$

Table 6-b-2 のつづき

	第 I 主成分 項目-全体(A)			GP 分析(B)		t 検定(C)
	平均値(SD)	負荷量	得点相関	下位群	上位群	
				平均値(SD)	平均値(SD)	
〔Ⅲ. 視線恐怖〕						
ANX6	1.80(.79)	.829	.684	1.11(.31)	2.61(.73)	$t=24.40$ $df=230.54$
ANX27	2.04(.90)	.797	.632	1.24(.49)	2.97(.72)	$t=25.39$ $df=297.43$
ANX20	2.20(.95)	.678	.511	1.25(.58)	2.94(.69)	$t=23.92$ $df=317.61$
ANX13	2.80(.91)	.707	.546	1.93(.79)	3.58(.53)	$t=21.76$ $df=259.74$
ANX33	2.10(.87)	.733	.565	1.33(.51)	2.91(.73)	$t=22.65$ $df=301.49$
初期主成分固有値	1	2.820	α 係数 = .801			
第 I 主成分説明率	56.4%	平均値(SD) : 2.19(.66)				
		尖度 : -.200				
		歪度 : .365				
		正規性の検定 : $z=2.178$, $p=.001$				

$N=313$

(A) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(B) : 下位群 5~8点 ($N=152$) ; 上位群 13~20点 ($N=169$)

(C) : すべて $p=.001$

	第 I 主成分 項目-全体(D)			GP 分析(E)		t 検定(F)
	平均値(SD)	負荷量	得点相関	下位群	上位群	
				平均値(SD)	平均値(SD)	
〔Ⅳ. 対人技能不安〕						
ANX31	1.91(.78)	.744	.577	1.23(.44)	2.47(.73)	$t=20.50$ $df=350.67$
ANX17	1.82(.82)	.775	.622	1.14(.38)	2.49(.78)	$t=22.09$ $df=317.87$
ANX10	2.01(.85)	.690	.530	1.31(.53)	2.69(.74)	$t=21.18$ $df=369.89$
ANX29	1.76(.71)	.682	.513	1.21(.41)	2.27(.70)	$t=18.32$ $df=347.40$
ANX8	1.95(.73)	.659	.490	1.36(.53)	2.42(.72)	$t=16.49$ $df=371.37$
ANX12	2.09(.79)	.572	.415	1.47(.65)	2.62(.68)	$t=16.56$ $df=372$
初期主成分固有値	1	2.857	α 係数 = .777			
第 I 主成分説明率	47.6%	平均値(SD) : 1.92(.54)				
		尖度 : .039				
		歪度 : .426				
		正規性の検定 : $z=2.143$, $p=.001$				

$N=313$

(D) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(E) : 下位群 6~9点 ($N=163$) ; 上位群 13~23点 ($N=211$)

(F) : すべて $p=.001$

荷量が高いので、“聴衆不安”と命名した。第II主成分の負荷量の高い項目をみると、相互作用の中で自分の行動の結果への懸念を示しているため、この主成分は“自己呈示不安”とした。第III主成分は、他者の視線に対する怖れを意味する項目の負荷量が高い。負荷量が負になっているので、本来は視線恐怖の欠如とすべきであるが、後の分析では得点の方向性をそろえるために項目得点の平均値をそのまま使用するので、“視線恐怖”と名づけた。最後の第IV主成分は、自己の対人技能の欠如感を表す項目から成っているため、“対人技能不安”とした。

本研究では、各主成分への負荷量の高い項目 ($|\text{.400}|$ 以上)を各下位尺度の構成項目と見做した。これらの下位尺度それぞれで、a)主成分分析での第I主成分負荷量の大きさ、b)項目-全体得点相関による項目の等質性、c)GP分析による項目の弁別性の検討を行った。Table 6-b-2 に示すように、すべての分析で良好な結果が得られ、各下位尺度の α 係数も十分であった (.777~.868)。各下位尺度で構成項目の評定値の平均値を下位尺度得点とした。いずれの得点分布も正規型とは有意に異なった。

これらの得点平均値と尺度中性点との比較をみると、自己呈示不安得点 (2.75) は、中性点よりも有意に高く ($t=9.78, df=592, p=.001$)、視線恐怖得点 (2.19) や対人技能不安得点 (1.92) は、中性点よりも有意に低かった ($t=11.48, df=592, p=.001$; $t=26.09, df=592, p=.001$)。また、聴衆不安得点 (2.49) は、中性点上にある ($t=.50, df=592, ns.$)。さらに、この4つの得点を t 検定によって比べると、0.1%水準で“自己呈示不安 > 聴衆不安 > 視線恐怖 > 対人技能不安”という順になる。日本人に特徴的であると言われる視線恐怖は、日常的にはそれほど感じられていないのである。

②限定分析

313名に限定して、尺度の単一次元性の検討と下位尺度ごとの検討を実施した。これらの結果を Appendix 2 a, 2 b に示す。

認知欲求3群の選別

認知欲求得点の分布に基づき、認知欲求が高い者、認知欲求が中程度の者、認知欲求が低い者に被験者を選別した (以下、低群、中群、高群と略記する)。限定分析での認知欲求得点の平均値 $\pm 0.5 \times$ 標準偏差を基準に被験者を3分割した (単純合計得点で、34~63点を低群、64~72点を中群、73~100点を高群)。

これら3群を独立変数として、S-M、対人不安、および認知欲求の各得点ごとに、一元分散分析を行い、その結果を Table 7 に示す。

Table 7
 セルフ・モニタリング, 対人不安, および認知欲求に関する
 認知欲求 3 群別平均値と一元分散分析の結果

	低群(N=104)	中群(N=114)	高群(N=95)	一元分散分析	Cochran の C
(セルフ・モニタリング)					
I. 他者の表出行動に対する敏感さ	2.61(.51)a	2.66(.55)a	2.81(.55)b	$F=3.986$ $p=.020$.352 $p=.922$
II. 自己呈示変容能力	2.69(.47)	2.76(.47)	2.81(.58)	$F=1.530$.433 $p=.017$
(対人不安)					
I. 聴衆不安	2.75(.52)c	2.52(.54)b	2.32(.58)a	$F=16.076$ $p=.001$.371 $p=.484$
II. 自己呈示不安	2.87(.52)	2.79(.54)	2.75(.56)	$F=1.404$.360 $p=.706$
III. 視線恐怖	2.38(.67)b	2.11(.61)a	1.98(.66)a	$F=9.803$ $p=.001$.358 $p=.765$
IV. 対人技能不安	2.13(.58)b	1.93(.50)a	1.87(.51)a	$F=6.777$ $p=.001$.399 $p=.133$
対人不安(31項目平均値)	2.53(.43)c	2.34(.43)b	2.22(.41)a	$F=13.514$ $p=.001$.344 $p=1.000$
認知欲求(27項目平均値)	2.14(.19)c	2.51(.10)b	2.91(.19)a	$F=569.668$ $p=.001$.446 $p=.006$

()内: SD

異なる英文字は, 5%水準で互いに異なることを示す(最小有意差法)。

F 値: $df=2/310$

全体的に, 仮説IIを支持して, 高群の適応的傾向が認められた。つまり, 認知欲求が高い者は, 低い者に比べて, 他者の表出行動に対する敏感さが高く, 対人不安も低い。しかし, 興味深いことに, 自己呈示不安については3群間に有意差がなかった。

セルフ・モニタリングと対人不安との関係

(1)相関分析

S-M と対人不安との関係をみるために, S-M 2 得点と全体的対人不安得点および下位尺度 4 得点との間のピアソン相関を算出した。その際, サンプル全体と認知欲求 3 群別にこの分析を行った。これらの結果を Table 8-a, 8-b に示す。

サンプル全体の結果をみると, S-M の 2 側面と対人不安との弁別的結びつきが認められる。つまり, 他者の表出行動に対する敏感さは, 全体得点と無関係であるが, 自己呈示変容能力のほうでは, 予測通りに有意な負の相関が得られた。対人不安下位尺度別では, 聴衆不安との関係ではともに負の相関がみられたが, 視線恐怖と対人技能不安は自己呈示変容能力との間でのみ有意な負の相関をみせた。また, 他者の表出行動に対する敏感さと自己呈示不安の間には予想とは逆に有意な正の相関が現れた。仮説 1-a や 1-b はおおむね支持された

Table 8-a
 セルフ・モニタリング, 対人不安, および認知欲求との関係: ピアソン相関

	SM-II	〔対人不安下位尺度〕				全体的 対人不安	認知欲求
		I. 聴衆不安	II. 自己呈示 不安	III. 視線恐怖	IV. 対人技能 不安		
〔セルフ・モニタリング〕							
I. 他者の表出行動に対する敏感さ	.352 <i>p</i> = .001	-.141 <i>p</i> = .013	.128 <i>p</i> = .024	-.045	-.047	-.052	.187 <i>p</i> = .001
II. 自己呈示変容能力	****	-.298 <i>p</i> = .001	-.064	-.217 <i>p</i> = .001	-.267 <i>p</i> = .001	-.297 <i>p</i> = .001	.109 <i>p</i> = .053

N = 313

Table 8-b
 セルフ・モニタリングと対人不安との関係: ピアソン相関 —認知欲求3群別—

	SM-II	〔対人不安下位尺度〕				全体的 対人不安
		I. 聴衆不安	II. 自己呈示 不安	III. 視線恐怖	IV. 対人技能 不安	
—認知欲求—低群 (<i>N</i> = 104) —						
〔セルフ・モニタリング〕						
I. 他者の表出行動に対する敏感さ	.251 <i>p</i> = .010	-.165 <i>p</i> = .095	.214 <i>p</i> = .029	.117	-.024	.011
II. 自己呈示変容能力	****	-.459 <i>p</i> = .001	.014	-.272 <i>p</i> = .005	-.398 <i>p</i> = .001	-.388 <i>p</i> = .001
—認知欲求—中群 (<i>N</i> = 114) —						
〔セルフ・モニタリング〕						
I. 他者の表出行動に対する敏感さ	.307 <i>p</i> = .001	-.199 <i>p</i> = .034	.004	-.168 <i>p</i> = .075	-.018	-.120
II. 自己呈示変容能力	****	-.415 <i>p</i> = .001	-.250 <i>p</i> = .007	-.353 <i>p</i> = .001	-.343 <i>p</i> = .001	-.456 <i>p</i> = .001
—認知欲求—高群 (<i>N</i> = 95) —						
〔セルフ・モニタリング〕						
I. 他者の表出行動に対する敏感さ	.461 <i>p</i> = .001	.068	.239 <i>p</i> = .020	.029	-.023	.099
II. 自己呈示変容能力	****	-.022	.071	-.001	-.028	-.011

Table 9

セルフ・モニタリングと対人不安との関係：重回帰分析の結果(標準偏回帰係数)
—全体および認知欲求3群別—

	〔対人不安下位尺度〕				
	I. 聴衆不安	II. 自己呈示 不安	III. 視線恐怖	IV. 対人技能 不安	全体的 対人不安
—全体(N=313)—					
〔セルフ・モニタリング〕					
I. 他者の表出行動に対する敏感さ	-.041	.172 <i>p</i> = .004	.037	.054	.060
II. 自己呈示変容能力	-.284 <i>p</i> = .001	-.124 <i>p</i> = .038	-.230 <i>p</i> = .001	-.286 <i>p</i> = .001	-.318 <i>p</i> = .001
<i>R</i> ²	.090 <i>p</i> = .001	.030 <i>p</i> = .009	.048 <i>p</i> = .001	.074 <i>p</i> = .001	.091 <i>p</i> = .001
—認知欲求—低群(N=104)—					
〔セルフ・モニタリング〕					
I. 他者の表出行動に対する敏感さ	-.053	.225 <i>p</i> = .027	.198 <i>p</i> = .043	.081	.116
II. 自己呈示変容能力	-.446 <i>p</i> = .001	-.043	-.322 <i>p</i> = .001	-.419 <i>p</i> = .001	-.417 <i>p</i> = .001
<i>R</i> ²	.213 <i>p</i> = .001	.048 <i>p</i> = .085	.111 <i>p</i> = .003	.165 <i>p</i> = .001	.163 <i>p</i> = .001
—認知欲求—中群(N=114)—					
〔セルフ・モニタリング〕					
I. 他者の表出行動に対する敏感さ	-.079	.089	-.066	.096	.023
II. 自己呈示変容能力	-.391 <i>p</i> = .001	-.277 <i>p</i> = .005	-.333 <i>p</i> = .001	-.373 <i>p</i> = .001	-.463 <i>p</i> = .001
<i>R</i> ²	.178 <i>p</i> = .001	.070 <i>p</i> = .018	.128 <i>p</i> = .001	.126 <i>p</i> = .001	.208 <i>p</i> = .001
—認知欲求—高群(N=95)—					
〔セルフ・モニタリング〕					
I. 他者の表出行動に対する敏感さ	.099	.262 <i>p</i> = .024	.037	-.013	.132
II. 自己呈示変容能力	-.068	-.049	-.018	-.022	-.072
<i>R</i> ²	.008	.059 <i>p</i> = .061	.001	.001	.014

が、仮説 1-b については他者の表出行動に対する敏感さの逆機能的影響が認められた。

次に認知欲求 3 群の結果を述べる。認知欲求-低群では、サンプル全体と同様な結果がみられた。また、認知欲求-高群では、S-M と対人不安との関係が希薄になり、他者の表出行動に対する敏感さと自己呈示不安との間に有意な正の相関があったのみであった。中群では、自己呈示変容能力のほうですべての組み合わせで有意な負の相関が得られ、他者の表出行動に対する敏感さでは、聴衆不安で有意な負の相関、視線恐怖で負の相関傾向性がみられた。これらの結果は、仮説 3-a と 3-b をおおむね支持している。

(2)重回帰分析

S-M の 2 側面のうちどちらが対人不安と強い関係があるかを検討するために、S-M 2 得点を説明変数とし、全体的対人不安得点および対人不安下位尺度 4 得点それぞれを従属変数とする重回帰分析を試みた。サンプル全体と認知欲求 3 群別にこれらの分析を行い、その結果を Table 9 に表す。

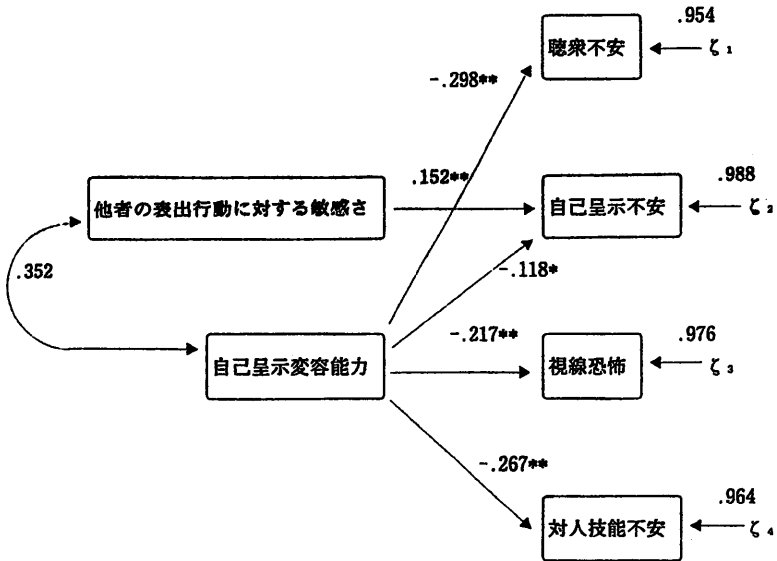
全体的対人不安得点を従属変数とした分析をみると、全体サンプル、認知欲求-低群および中群で有意な関連が認められ、いずれの場合も自己呈示能力のみが有意な寄与を示した。

次に、対人不安下位尺度 4 得点別の結果を述べる。

サンプル全体の結果をみると、いずれの分析でも自己呈示変容能力の有意な寄与が認められた。ただし、他者の表出行動に対する敏感さは、自己呈示不安の有意な正の規定因であった。

次に認知欲求 3 群別の結果を述べる。認知欲求-低群では、自己呈示不安を除く 3 つの対人不安下位尺度得点ではいずれも有意な関連が得られた。聴衆不安と対人技能不安では、自己呈示変容能力のみが有意な負の規定因であった。視線恐怖では、S-M の 2 得点いずれでも有意な寄与があったが、他者の表出行動に対する敏感さは正、自己呈示変容能力は負の係数をそれぞれ示した。認知欲求-中群の分析結果をみると、対人不安の 4 得点ともに、自己呈示変容能力のみが有意な規定因であった。認知欲求-高群では、対人不安の 4 得点いずれでも有意な関連がみられなかった。

一連の重回帰分析の結果によると、先の相関分析と同様に、仮説 1-a, b および仮説 3-a, b がおおむね支持され、とりわけ他者の表出行動に対する敏感さの逆機能的影響が見出された。



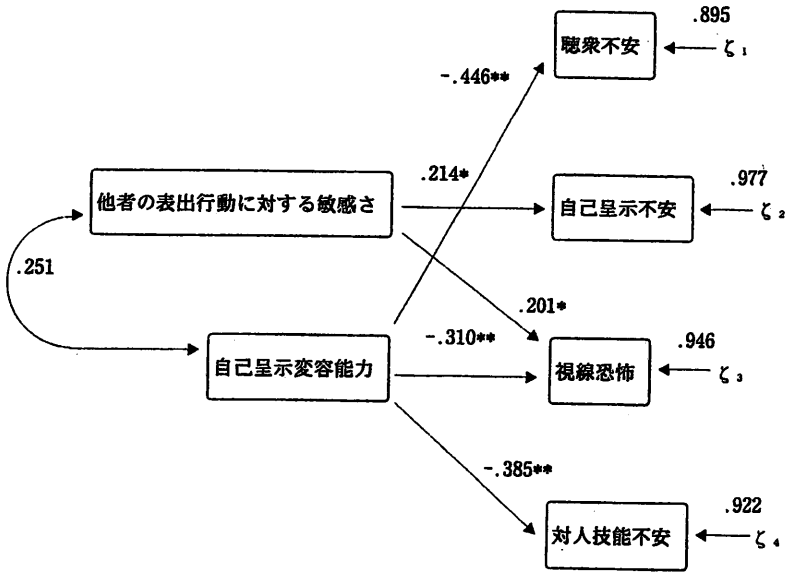
*: $p < .05$; **: $p < .01$

決定係数 .131 $\chi^2(3) = 3.68 (p = .298)$ GFI = .996 AGFI = .973

Fig. 1-a セルフ・モニタリングと対人不安との関係に関する多変量回帰分析の結果：完全標準化解—全体サンプル ($N = 313$)—

(3)多変量回帰分析

S-M 2 得点と対人不安下位尺度 4 得点との全体的関係をみるために、LISREL 7 (Jöreskog & Sörnborn, 1988) を利用して多変量回帰分析を試みた。相関分析や重回帰分析の結果に基づき、全体サンプルと認知欲求-低群を対象とした。S-M 2 得点を予測変数とし、対人不安下位尺度 4 得点を目的変数としたモデルを設定した。ただし、対人不安変数間に因果的関係を仮定しなかった。a) 当該パスの有意水準や、b) モデル自体のデータ適合度を基準にして、最適なモデルを選択した。これらの結果 (完全標準化解) を Fig. 1-a, 1-b に表す。全体サンプルおよび認知欲求-低群のいずれでも、先の重回帰分析と同様な構図が得られた。



*: $p < .05$; **: $p < .01$

決定係数 .368 $\chi^2(3) = 2.10 (p = .552)$ GFI = .993 AGFI = .953

Fig. 1-b セルフ・モニタリングと対人不安との関係に関する多変量回帰分析の結果：完全標準化解—認知欲求-低群 (N=104)—

IV. 考察

対人不安およびセルフ・モニタリングの基本的構造

本研究では、林・小川 (1981) によって作成された測度を用いて対人不安を測定した。主成分分析によって、対人不安が聴衆不安、自己呈示不安、視線恐怖、対人技能不安の4側面から成ることが明らかになった。

Leary (1983) は、対人不安が“随伴性”次元と“自己呈示効果”次元から構成されることを提案している。種々の対人場面は、随伴的な対人場面から非随伴的な対人場面を両極とする連続体上に位置づけることができる。前者の場面

は、自他の反応の連鎖によって成り立つ相互作用を指しており、後者の場面では、自分の描いたシナリオに従って行動を決めることができ、他者の反応に自分の反応が左右されにくい。また、自己呈示効果次元は、不安が自己の否定的印象が実際につくられたことによるのか、否定的印象を抱かれるかもしれないという予想によって生じたものかに関わる次元である。この Leary の枠組みに従って、本研究で得られた対人不安の4側面を位置づけてみよう。

聴衆不安は、非随伴的な場面で生じるものである。他の3側面は、どちらかといえば随伴的場面に関わる。自己呈示不安や対人技能不安は、自己呈示効果次元に位置づけられる。前者は自己の行動の結果、後者は自己の対人技能の低さに由来する。しかし、“現実の結果”か“予想”かという分化ではない。視線恐怖は、自己呈示の結果の予想に由来するように思われる。つまり、自己の行動が他者にどのような影響をもたらすかを表す指標として他者の視線が位置づけられていると考えれば、他者の視線は、実際の自己呈示行動の前に不安を喚起するかもしれない。

ところで、4側面の平均値を比較すると、高い順に“自己呈示不安>聴衆不安>視線恐怖>対人技能不安”の傾向があった。この傾向は、次の2点で特徴的といえる。a)日本人に特徴的であるといわれる視線恐怖がそれほど高くはない、b)自己呈示不安が最も高く、対人技能不安が最も低い。

a)については、木村(1982)は、大学での対人恐怖症に関する講義の受講生に講義感想を書かせ、半数以上が自らの対人恐怖症傾向を自覚していることに加え、そのうちでも視線恐怖に関わる症状を訴える者が多いことを報告している。しかし、内沼(1990)によれば、対人恐怖の中核群は、赤面恐怖、表情恐怖、視線恐怖であり、“赤面恐怖→表情恐怖→視線恐怖”という症状変遷がみられる。木村自身が認めているように、木村のデータ収集の方法が講義内容にかなり影響されている点を考えると、視線恐怖が日常的に経験されていると考えるよりも、ふだんは抑えられている視線恐怖感情が対人不安症状の悪化とともに高められていくと考えるほうが適切かもしれない。

次に、b)について述べる。自分自身の対人技能評価(対人技能不安)と自分が対人技能を発揮した結果(自己呈示不安)は“原因と結果”の関係にあるはずである。しかし、原因に関する懸念はそれほどでなく、結果についての懸念が高いことは、一見すると奇妙にみえる。ところで、長田(1994)は、現代青年の特長に関する次のような興味深い指摘を行っている。対人技能に欠けがちな青年は、仲間との間に適度な距離をおくことによって表面的には円滑な対人

関係を維持する。これは、価値観の形成・深化を妨げ、生きがいや充実感を得にくくする。この指摘に従って、本研究の傾向を解釈しよう。対人技能の有無は、自分自身の評価に関わるので、あまり目を向けられることはない。自己の対人技能の低さを自覚しそれを高めようとする努力はあまり行われないので、親密な対人関係の構築は目標とされない。表面的に円滑な対人関係を維持するためには、自己の行動を相互作用中の他者がどのようにみているかが重要となる。つまり、不特定多数の者が自分を一般的にどのようにみているかはあまり気にされないため、聴衆不安や視線恐怖は高くないのである。対人不安の4側面のうち、自己呈示不安が最も生起しやすいことになる。

本研究では、S-M傾向を測定するために、Lennox & Wolfe (1984) による改訂 S-M 尺度を用いたが、予想通り、他者の表出行動に対する敏感さと自己呈示変容能力の2主成分が現れた。これは、Lennox & Wolfe の主張する S-M の2側面が、我が国の研究でも比較的安定して認められていることになる(石原・水野, 1992; 諸井, 1995)。

ところで、Snyder & Gangestad (1986) は、Lennox & Wolfe (1984) が S-M 概念を狭めたことを批判するとともに、他の因子分析研究にも触れながら、S-M 概念の単一次元性を主張した。彼らは、原 S-M 尺度の下位尺度が他の概念と異なる結びつきを示すことを次のように解釈した。一般的因子としての S-M と下位尺度因子との関係では説明できない分散が下位尺度因子に含まれており、説明できない分散によって他の概念との一見矛盾する関係を生じることがある。このように主張した上で、原尺度 25 項目のうち、未回転第 I 主成分負荷量を基準にして 18 項目を修正 S-M 尺度として提案している。しかし、この 18 項目尺度も John, Cheek, & Klohnen (1996) によって、S-M の外向的側面に偏っているという理由で、批判された。彼らは、原 25 項目尺度の利用を推奨している。S-M の次元性についてはさまざまな実証的研究が試みられているが、その論議は他の機会にすることとし、ここでは、一応 Lennox & Wolfe による狭められた定義に従って論議する。

もともと、彼らによる原 S-M 尺度に対する批判の中心は、S-M 下位尺度が他の概念と不適応的な結びつきをみせることにある。しかし、本研究でも、他者の表出行動に対する敏感さと自己呈示不安との間に有意な正の相関が得られた。この不適応的な結びつきは、改訂 S-M 尺度自体の不適切さを示すことになる。しかし、実は、Snyder (1979) によって提起された S-M 概念が適応概念であるかを再吟味する必要がある。Snyder は、低 S-M 者が対人状況の中で何も

しないのではなく、状況に適合する自己特徴の探索を試みることを示唆している。そのような自己特徴探索に依存した方略と、状況に適合した自己をつくる方略がどちらが適応的なのだろうか。これは、対人状況の中で失敗する確率の問題かもしれない。一般的には、日常生活で多様な状況に直面することを考えると、高 S-M 者のほうが相対的に適応的といえるだろう。

セルフ・モニタリングと対人不安

本研究では、S-M の 2 側面が対人不安と異なる関係を示すと予測した (仮説 1-a, 1-b)。全体分析では、自己呈示能力が対人不安のいずれの側面とも、予測通り負の関係をみせた。他者の表出行動に対する敏感さは、予測と一致して対人不安との関係が希薄であるが、自己呈示不安を高める働きを示した。また、認知欲求-低群では、他者の表出行動に対する敏感さは、視線恐怖に対しても同様の逆機能的影響をみせた。

Snyder (1979) によれば、対人場面の中で他者のふるまいに敏感になることは、当該の状況の中で自分がどのように行動すればよいかを決定するための情報をもたらすことになる。しかし、そのような情報収集が先述したような危険を孕むこともある (仮説 1-b)。本研究で見出された自己呈示不安に対する逆機能的影響は、そのような危険が十分に大きいことを示している。他者のふるまいに対する過度の敏感さは、収集された情報相互の不一致や矛盾をもたらすために、自分の行動が相手にどのような印象を形成するかに関する肯定的確信をもてなくなるのであろう。また、認知欲求-低群での視線恐怖に関する結果も、次のように解釈できる。他者のふるまいのモニタリングは、当然、相手との視線接触の機会を高める。そのため、収集された情報相互の不一致や矛盾の可能性に加え、他者の視線に否定的意味づけをするようになるかもしれない。

本研究では、S-M と対人不安との関係が認知欲求の高さによって異なることを予測した仮説 3-a, 3-b も支持された。認知欲求-高群と認知欲求-低群で、S-M 変数や対人不安変数の分散が異なることが考えられる。実際、自己呈示変容能力についてのみ 3 群間に差がみられた (Table 7 での Cochran の C 参照)。しかし、高群の分散のほうが大きいことから、認知欲求-高群の変数分散が小さいために相関が低下したとは考えられない。したがって、本研究の結果は人工の結果とはいえないだろう。

多変量回帰分析の結果からすると、認知欲求-低群の対人不安 4 得点の分散 36.8% が S-M 2 得点によって説明できる。認知欲求が低い者では、種々の認知的過程が活性化されないので S-M の働きが対人不安を直線的に決定する。しか

し、認知欲求が高い場合には、S-M 以外の認知的過程の活性化を伴い、S-M と対人不安との関係が曖昧にされる。

今後の課題と臨床的含蓄

S-M と対人不安との関係を調べた本研究では、次のような傾向を得ることができた。a) S-M の側面によって対人不安との関係が異なる、b) 認知欲求の高さによって S-M と対人不安との関係が異なる。しかし、次に述べるようなさまざまな問題点もある。

a) S-M の基本的構造： 本研究では Lennox & Wolfe (1984) による改訂 S-M 尺度を用いたが、先述したように、Snyder & Gangestad (1986) による反批判を受けている。つまり、S-M 概念の再吟味を含めた尺度の検討が必要であろう。

b) 対人不安の基本的構造： 本研究では林・小川 (1981) の対人関係質問票を改良した尺度を作成したが、対人不安を測定する尺度は他にもある。たとえば、永井 (1994) は、林・小川の尺度を基礎にした対人恐怖心性尺度を開発した。本研究の理論的背景となる対人不安理論を提起した Leary (1983) も、随伴の場面での不安と非随伴的場面での不安を弁別する対人不安性尺度を作成している。したがって、本研究で得られた対人不安の基本的構造の妥当性の検討とともに、他の対人不安尺度との関連も概念的および実証的に検討する必要があるであろう。

c) 自己呈示効率概念の妥当性： S-M と対人不安との関係を説明するために、Leary (1983) による自己呈示効率概念を用いたが、本研究では自己呈示効率自体を測定しているわけではない。この自己呈示効率概念の妥当性を実証的に検討する必要があるであろう。そのことによって、S-M のもつ逆機能的側面の働きも明確にできる。

d) 認知欲求の効果： 予想通り、認知欲求-高群の場合、S-M と対人不安との関係が希薄になった。認知欲求が高い者の対人不安はどのようなものによって規定されているかを調べることが必要となる。

e) 過程概念としての S-M： 先述したように、Snyder (1979) によって提唱された S-M は単なる対人技能概念というよりも一連の認知的過程を示す概念である。したがって、S-M と対人不安との関係を検討する場合も“過程”的モデルを考えるべきであろう。

以上の問題点を克服しながら、今回の研究では含めなかった男子も対象としながら、S-M と対人不安との関係を実証的に検討する作業をさらに進めていく

必要がある。

最後に、本研究の結果から、対人不安の悩みをもつ者に対する治療方略研究に役立つと思われる点を述べておく。

一般的には、対人不安の抑制のためには、その人が種々の状況にあわせてさまざまな行動をとる技能を社会的技能訓練などによって身につけることが重要となる。その際、他者のふるまいに対して過度に敏感になることは、他者に肯定的印象が形成されたかを懸念させることになるので、注意しなくてはならない。とりわけ、認知欲求が低い者では、視線恐怖を生じる可能性がある。先述した“赤面恐怖→表情恐怖→視線恐怖”という症状変遷の指摘（内沼，1990）を考えると、他者のふるまいへの注意が対人恐怖症の“最終段階”への移行促進という逆機能効果をもつのである。また、認知欲求が高い者の場合には、社会的技能訓練自体が対人不安の抑制効果をもたらさない可能性が高いので、S-M 以外にどのような認知的過程が対人不安に関わっているのかを面接などで明らかにする必要がある。

Leary (1983) 自身は、社会的技能訓練の考えの基底にある社会的技能アプローチについては批判的である。ここでは、社会的技能訓練が万能であると主張しているのではなく、先述したように S-M 過程が他の種々の認知的過程を伴うと前提したうえでの訓練を考えるべきである。単なる行動の習得とは異なり、その人の認知的世界の再構成や対人観の変容も含まれるだろう。

〈付記〉

(1)本研究の構想は、安東美恵子嬢と家田亮臣君（平成5年度社会学科卒業）が筆者の指導の下で取り組んだ卒業研究（安東・家田，1994）に由来する。その後、追加データを収集し、さらに、浅野浩一君、伊藤啓介君、神谷尚子嬢、渡邊美穂子嬢（平成7年度社会学科卒業）による卒業研究データ（浅野・伊藤・神谷・渡邊，1996）の一部も利用した。彼らの熱意に敬意を表する。

(2)本論文では、social anxiety を対人不安と訳した。社会心理学に関する辞典をみると、この用語を“対人不安”（小川，1995）と訳している場合と、“社会的不安”（古畑，1994）としている場合がある。実は、筆者は、社会的不安という訳語を用いていた（諸井，1995）。しかし、生和（Leary, 1983）での監訳者まえがき）が述べているように、社会事象に対する不安を指す言葉として“社会不安 (social unrest)”という用語が定着しているし、Leary の主張自体がきわめて“対人関係”的なニュアンスをもっているため、本論文では対人不安とした。

(3)本研究では、統計処理のために、MS-DOS 版 SPSS/PC+ (V 3.0 J 版) と

SPSS 6.1.3 J for Windows を利用した。なお、多変量回帰分析については、“LISREL の奇才”である吉川 徹先生（社会学科社会調査法助教授）に初歩的指導を頂いた。しかしながら、筆者の“構造的思考”の欠如のために、LISREL の本質を活かした分析となっていないことは否定できない。

(4) E-Mail: moroi@ipcs.shizuoka.ac.jp

V. 引用文献

American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fourth Edition.* <DSM-IV> Washington, DC: American Psychiatric Association.

安藤清志 1994 『セレクション社会心理学 1 見せる自分／見せない自分—自己呈示の社会心理学—』 サイエンス社

安東美恵子・家田亮臣 1994 女子大学生における対人不安と自己呈示能力—認知欲求の仲介的働き—(1)・(2) 静岡大学人文学部社会学科平成5年度卒業論文 未公刊

浅野浩一・伊藤啓介・神谷尚子・渡邊美穂子 1996 女子短大生における対人有能性と対人不安との関係—対同性関係と対異性関係—(1)・(2)・(3)・(4) 静岡大学人文学部社会学科平成7年度卒業論文 未公刊

Briggs, S.R., Cheek, J.M., & Buss, A.H. 1980 An analysis of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 679-686.

Cacioppo, J.T. & Petty, R.E. 1982 The need for cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 116-131.

D'Agostino, P.R. & Fincher-Kiefer, R. 1992 Need for cognition and the correspondence bias. *Social Cognition*, 10, 151-163.

古畑和孝(編) 1994 『社会心理学小辞典』 有斐閣

Gabrenya, W.K., & Arkin, R.M. 1980 Self-Monitoring Scale: Factor structure and correlates. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 6, 13-22.

林 洋一・小川捷之 1981 対人不安意識尺度構成の試み 横浜国立大学保健管理センター年報, 1, 29-46.

堀毛一也 1989 社会行動とパーソナリティ 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一

- 編『社会心理学パースペクティブ1 個人から他者へ』 誠信書房 Pp. 207-232.
- 石原俊一・水野邦夫 1992 改訂セルフ・モニタリング尺度の検討 心理学研究, 63, 47-50.
- 岩淵千明・田中國夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53, 54-57.
- Jöreskog, K.G. & Sörnborn, D. 1988 *LISREL 7: A guide to the program and applications. 2nd edition.* Chicago: SPSS Inc.
- 加藤隆勝 1987 『青年期の意識構造—その変容と多様化—』 誠信書房
- 木村 駿 1982 『日本人の対人恐怖』 勁草書房
- Lassiter, G.D., Briggs, M.A., & Slaw, R.D. 1991 Need for cognition, causal processing, and memory for behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 694-700.
- Leary, M.R. 1983 *Understanding social anxiety: Social, personality, and clinical perspectives.* Sage. (生和秀敏監訳『対人不安』 1990 北大路書房)
- Lennox, R.D., & Wolfe, R.N. 1984 Revision of the Self-Monitoring Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1349-1364.
- 諸井克英 1995 『孤独感に関する社会心理学的研究—原因帰属および対処方略との関係を中心として—』 風間書房
- 諸井克英 1996 臨床社会心理学とは何か 人文論集 (静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告), 47(1), 49-74.
- 永井 徹 1994 『対人恐怖の心理—対人関係の悩みの分析—』 サイエンス社
- 神山貴弥・藤原武弘 1991 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, 6, 184-192.
- 小川一夫(監修) 1995 『改訂新版 社会心理学用語辞典』 北大路書房
- 長田雅喜 1994 仲間・家族と現代青年 久世敏雄(編)『現代青年の心理と病理』 福村出版 Pp.111-123.
- 斎藤和志・中村雅彦 1987 对人的志向性尺度作成の試み 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 34, 97-109.
- Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- Snyder, M. 1979 Self-monitoring processes. *Advanced in Experimental*

Social Psychology, 12, 85-128.

Snyder, M. & Gangestad, S. 1986 On the nature of self-monitoring: Matters of assessment, matters of validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 125-139.

内沼幸雄 1990 【对人恐怖】 講談社

Appendix 1

本分析における認知欲求尺度の単一次元性の検討： 主成分分析における第 I 主成分負荷量を基準とする項目選別

	第 I 主成分 項目-全体(A)			GP 分析(B)		t 検定(C)	
	平均値(SD)	負荷量	得点相関	下位群	上位群		
				平均値(SD)	平均値(SD)		
NC1	2.73(.75)	.475	.406	2.27(.71)	3.19(.64)	t = 8.92	df = 172
NC4	1.92(.74)	.609	.538	1.44(.52)	2.55(.76)	t = 11.12	df = 150.07
NC5	2.18(.76)	.306	.258	1.95(.76)	2.53(.73)	t = 5.14	df = 172
NC6	2.68(.78)	.370	.314	2.31(.73)	3.07(.72)	t = 6.94	df = 172
NC8	2.65(.68)	.605	.533	2.14(.65)	3.08(.56)	t = 10.31	df = 172
NC9	2.69(.78)	.426	.351	2.34(.80)	3.05(.72)	t = 6.12	df = 172
NC10	3.06(.64)	.525	.467	2.67(.60)	3.45(.55)	t = 8.99	df = 172
NC14	2.03(.77)	.290	.232	1.75(.67)	2.33(.82)	t = 5.09	df = 163.60
NC17	1.92(.64)	.312	.262	1.70(.61)	2.10(.65)	t = 4.19	df = 172
NC18	2.92(.77)	.431	.374	2.52(.76)	3.35(.68)	t = 7.55	df = 172
NC19	2.68(.87)	.504	.443	2.13(.91)	3.16(.68)	t = 8.53	df = 161.61
NC21	1.96(.70)	.370	.301	1.70(.57)	2.29(.84)	t = 5.38	df = 149.45
NC23	2.44(.72)	.625	.555	1.91(.56)	2.95(.65)	t = 11.37	df = 172
NC24	2.61(.71)	.513	.445	2.17(.61)	3.08(.69)	t = 9.23	df = 172
NC25	2.52(.86)	.491	.433	1.99(.75)	3.02(.78)	t = 8.91	df = 172
NC29	2.29(.74)	.493	.433	1.80(.61)	2.71(.72)	t = 9.06	df = 172
NC32	3.01(.71)	.537	.463	2.53(.71)	3.50(.59)	t = 9.77	df = 167.59
NC33	2.49(.72)	.634	.567	1.99(.58)	3.05(.65)	t = 11.37	df = 172
NC34	2.97(.78)	.472	.406	2.52(.82)	3.43(.59)	t = 8.44	df = 157.85
NC36	2.30(.69)	.501	.432	1.92(.63)	2.73(.62)	t = 8.56	df = 172
NC37	2.60(.81)	.378	.318	2.23(.77)	3.01(.85)	t = 6.40	df = 172
NC38	2.22(.64)	.558	.489	1.80(.55)	2.64(.63)	t = 9.41	df = 172
NC39	2.26(.76)	.365	.307	2.01(.69)	2.64(.80)	t = 5.58	df = 172
NC40	2.01(.71)	.604	.528	1.53(.57)	2.51(.66)	t = 10.46	df = 172
NC41	3.04(.81)	.487	.412	2.64(.97)	3.45(.57)	t = 6.79	df = 140.57
NC43	2.90(.74)	.353	.312	2.65(.66)	3.30(.69)	t = 6.40	df = 172
NC45	2.66(.73)	.412	.352	2.32(.67)	3.09(.73)	t = 7.30	df = 172
初期主成分固有値	1	6.192	α 係数 = .862				
	2	1.829	平均値(SD) : 2.51(.35)				
	3	1.445	尖度 : .473				
	4	1.425	歪度 : .073				
	5	1.270	正規性の検定 : $z = .895, p = .400$				
	6	1.180					
	7	1.077					
	8	1.033					
第 I 主成分説明率	22.9%						

N = 313

(A) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p = .001$

(B) : 下位群 34~62点(N=88) ; 上位群 74~100点(N=86)

(C) : すべて $p = .001$

Appendix 2-a
本分析における対人不安尺度の単一次元性の検討

	第 I 主成分 項目-全体(A)			GP 分析(B)		t 検定(C)	
	平均値 (SD)	負荷量	得点相関	下位群 平均値(SD)	上位群 平均値(SD)		
ANX2	3.14 (.68)	.210	.215	2.96 (.78)	3.45 (.55)	t = 4.61	df = 148.50
ANX3	2.11 (.79)	.687	.615	1.49 (.63)	2.71 (.69)	t = 11.96	df = 165
ANX4	2.56 (.81)	.569	.520	1.93 (.83)	3.00 (.64)	t = 9.31	df = 156.01
ANX5	2.43 (.76)	.653	.579	1.82 (.71)	2.96 (.61)	t = 11.08	df = 165
ANX6	1.78 (.78)	.618	.574	1.20 (.43)	2.39 (.85)	t = 11.28	df = 121.30
ANX8	1.96 (.71)	.615	.577	1.36 (.51)	2.48 (.67)	t = 12.24	df = 152.74
ANX9	2.09 (.75)	.515	.460	1.62 (.64)	2.49 (.72)	t = 8.30	df = 165
ANX10	2.09 (.82)	.615	.543	1.55 (.70)	2.66 (.74)	t = 10.02	df = 165
ANX11	2.67 (.84)	.503	.454	2.20 (.88)	3.12 (.74)	t = 7.32	df = 165
ANX12	2.16 (.77)	.469	.418	1.76 (.65)	2.58 (.80)	t = 7.24	df = 157.90
ANX13	2.74 (.90)	.569	.531	2.08 (.73)	3.47 (.70)	t = 12.48	df = 165
ANX16	2.57 (.89)	.347	.337	2.12 (.97)	2.98 (.72)	t = 6.48	df = 152.35
ANX17	1.91 (.81)	.665	.611	1.26 (.52)	2.57 (.80)	t = 12.50	df = 140.25
ANX18	2.61 (.88)	.546	.493	2.00 (.89)	3.16 (.69)	t = 9.38	df = 156.00
ANX19	1.79 (.76)	.451	.412	1.32 (.62)	2.23 (.72)	t = 8.70	df = 165
ANX20	2.16 (.93)	.479	.434	1.52 (.84)	2.71 (.80)	t = 9.31	df = 165
ANX21	2.78 (.80)	.473	.463	2.35 (.86)	3.27 (.61)	t = 8.01	df = 149.56
ANX22	2.45 (.89)	.452	.441	1.89 (.88)	2.96 (.79)	t = 8.29	df = 165
ANX24	2.52 (.78)	.685	.622	1.89 (.70)	3.14 (.61)	t = 12.39	df = 165
ANX25	2.41 (.83)	.605	.543	1.79 (.75)	2.99 (.72)	t = 10.57	df = 165
ANX26	2.28 (.80)	.531	.487	1.77 (.73)	2.86 (.72)	t = 9.63	df = 165
ANX27	2.03 (.88)	.581	.542	1.43 (.59)	2.76 (.89)	t = 11.38	df = 141.58
ANX29	1.81 (.73)	.544	.508	1.39 (.54)	2.39 (.81)	t = 9.33	df = 142.47
ANX30	3.27 (.72)	.234	.236	3.05 (.82)	3.64 (.53)	t = 5.53	df = 142.49
ANX31	1.95 (.78)	.582	.522	1.48 (.61)	2.49 (.77)	t = 9.45	df = 155.96
ANX32	2.73 (.88)	.515	.475	2.21 (.88)	3.28 (.69)	t = 8.71	df = 156.65
ANX33	2.08 (.85)	.595	.565	1.39 (.52)	2.70 (.87)	t = 11.83	df = 133.30
ANX34	2.61 (.87)	.405	.399	2.18 (.81)	3.13 (.76)	t = 7.84	df = 165
ANX35	2.39 (.78)	.681	.606	1.81 (.72)	2.99 (.63)	t = 11.22	df = 165
ANX36	2.51 (.81)	.714	.673	1.74 (.68)	3.13 (.60)	t = 14.06	df = 165
ANX39	2.65 (.87)	.547	.517	2.05 (.92)	3.28 (.67)	t = 9.91	df = 151.81
<hr/>							
初期主成分固有値	1	9.389	α 係数 = .919				
	2	2.612	平均値 (SD) : 2.36 (.44)				
	3	1.890	尖度 : -.021				
	4	1.642	歪度 : -.029				
	5	1.180	正規性の検定 : $z = .766, p = .601$				
	6	1.062					
第 I 主成分説明率	30.3%						

N = 313

(A) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p = .001$

(B) : 下位群 38~65点 (N = 84) ; 上位群 82~116点 (N = 83)

(C) : すべて $p = .001$

Appendix 2-b
本分析における対人不安下位尺度の単次元性の検討

	第 I 主成分 平均値 (SD)	項目-全体(A) 負荷量	項目-全体(A) 得点相関	GP 分析(B)		t 検定(C)
				下位群 平均値 (SD)	上位群 平均値 (SD)	
[I . 聴衆不安]						
ANX25	2.41 (.83)	.767	.671	1.63 (.60)	3.16 (.63)	t=16.54 df=175
ANX24	2.52 (.78)	.794	.699	1.82 (.62)	3.22 (.55)	t=15.80 df=175
ANX35	2.39 (.78)	.761	.655	1.77 (.66)	3.13 (.56)	t=14.62 df=175
ANX5	2.43 (.76)	.720	.614	1.83 (.70)	3.03 (.53)	t=12.91 df=174.26
ANX11	2.67 (.84)	.575	.478	2.08 (.80)	3.20 (.76)	t= 9.52 df=175
ANX36	2.51 (.81)	.762	.683	1.78 (.60)	3.27 (.55)	t=17.05 df=175
ANX18	2.61 (.88)	.686	.592	1.90 (.81)	3.29 (.66)	t=12.62 df=174.92
ANX4	2.56 (.81)	.627	.531	1.93 (.78)	3.13 (.59)	t=11.70 df=174.27
ANX32	2.73 (.88)	.578	.483	2.11 (.75)	3.39 (.69)	t=11.77 df=175

初期主成分固有値	4.424	α 係数 = .866				
第 I 主成分説明率	49.2%	平均値 (SD) : 2.54 (.57)				
		尖度 : .175				
		歪度 : -.457				
		正規性の検定 : $z=1.557, p=.016$				

N=313

(A) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(B) : 下位群 9~20点 (N=98) ; 上位群 27~36点 (N=79)

(C) : すべて $p=.001$

	第 I 主成分 平均値 (SD)	項目-全体(D) 負荷量	項目-全体(D) 得点相関	GP 分析(E)		t 検定(F)
				下位群 平均値 (SD)	上位群 平均値 (SD)	
[II . 自己呈示不安]						
ANX34	2.61 (.87)	.733	.549	1.91 (.62)	3.40 (.70)	t=15.88 df=196
ANX21	2.78 (.80)	.736	.562	2.11 (.72)	3.39 (.55)	t=14.12 df=186.78
ANX22	2.45 (.89)	.720	.549	1.72 (.74)	3.10 (.76)	t=13.01 df=196
ANX2	3.14 (.68)	.571	.393	2.74 (.70)	3.58 (.52)	t= 9.55 df=183.78
ANX30	3.27 (.72)	.590	.410	2.79 (.77)	3.85 (.36)	t=12.44 df=144.15
ANX16	2.57 (.89)	.618	.441	1.86 (.85)	3.20 (.66)	t=12.41 df=187.48

初期主成分固有値	1	2.654	α 係数 = .745			
	2	1.106	平均値 (SD) : 2.81 (.54)			
第 I 主成分説明率	44.2%	尖度 : -.303				
		歪度 : -.124				
		正規性の検定 : $z=1.365, p=.048$				

N=313

(D) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(E) : 下位群 8~15点 (N=101) ; 上位群 19~24点 (N=97)

(F) : すべて $p=.001$

Appendix 2-b のつづき

	第 I 主成分		項目-全体(A)		GP 分析(B)		t 検定(C)
	平均値 (SD)	負荷量	得点相関	下位群 平均値 (SD)	上位群 平均値 (SD)		
[Ⅲ. 視線恐怖]							
ANX6	1.78 (.78)	.852	.730	1.07 (.25)	2.59 (.72)	t=18.94	df=111.33
ANX27	2.03 (.88)	.799	.644	1.26 (.51)	2.97 (.68)	t=18.94	df=165.80
ANX20	2.16 (.93)	.674	.514	1.26 (.60)	2.88 (.68)	t=16.78	df=176
ANX13	2.74 (.90)	.758	.607	1.93 (.76)	3.59 (.50)	t=17.28	df=149.62
ANX33	2.08 (.85)	.759	.610	1.32 (.49)	2.87 (.72)	t=16.75	df=157.37
初期主成分固有値	1	2.968	α 係数 = .823				
第 I 主成分説明率	59.4%		平均値 (SD) : 2.16 (.67)				
			尖度 : -.221				
			歪度 : .400				
			正規性の検定 : z=1.472, p=.026				

N=313

(A) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(B) : 下位群 5~8点 (N=88) ; 上位群 13~20点 (N=90)

(C) : すべて $p=.001$

	第 I 主成分		項目-全体(D)		GP 分析(E)		t 検定(F)
	平均値 (SD)	負荷量	得点相関	下位群 平均値 (SD)	上位群 平均値 (SD)		
[Ⅳ. 対人技能不安]							
ANX31	1.95 (.78)	.763	.608	1.30 (.48)	2.69 (.69)	t=15.62	df=142.49
ANX17	1.91 (.81)	.797	.658	1.21 (.43)	2.73 (.68)	t=17.66	df=134.33
ANX10	2.09 (.82)	.706	.557	1.46 (.62)	2.88 (.70)	t=14.69	df=186
ANX29	1.81 (.73)	.713	.553	1.27 (.45)	2.46 (.75)	t=12.86	df=128.49
ANX8	1.96 (.71)	.694	.532	1.44 (.55)	2.56 (.67)	t=12.32	df=161.36
ANX12	2.16 (.77)	.536	.392	1.68 (.67)	2.70 (.74)	t= 9.88	df=186
初期主成分固有値	1	2.993	α 係数 = .795				
第 I 主成分説明率	49.9%		平均値 (SD) : 1.98 (.54)				
			尖度 : -.078				
			歪度 : .368				
			正規性の検定 : z=1.683, p=.007				

N=313

(D) : 当該項目得点と当該項目を除く総得点との間のピアソン相関, すべて $p=.001$

(E) : 下位群 6~10点 (N=104) ; 上位群 14~23点 (N=84)

(F) : すべて $p=.001$